



TITLE:

<3>地域連携 : 関西地区FD連絡協議会 の2年目の活動成果

AUTHOR(S):

CITATION:

<3>地域連携 : 関西地区FD連絡協議会の2年目の活動成果. 京都大学高等教育叢書 2010, 28: 213-281

ISSUE DATE:

2010-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/108503>

RIGHT:

Ⅲ. 地域連携

－関西地区 FD 連絡協議会の 2 年目の活動成果－

Ⅲ－１．活動成果の概要

関西地区FD連絡協議会は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）に関して地域連携する互助組織として、2008年4月に発足した。協議会は、この2年間、5つのワーキング・グループ（FD情報支援・FD共同実施・FD連携企画・広報・研究）を中心に、活動を推進してきた。現在、本協議会には、関西地区の過半数を超える129校（111法人）が参加している。

ちなみに、本書でも報告されているように、平成21年9月9日・10日に京都大学で開催された「FDネットワーク代表者会議（JFDN：Japan FD Network）」には、「いわて高等教育コンソーシアム」「東北地域高等教育開発コンソーシアム」「東日本地区大学間FDネットワーク・つばさ」「大学コンソーシアム石川」「F-レックス（福井県内大学・高専連携プロジェクト）」「FD・SDコンソーシアム名古屋」「全国私立大学FD連携フォーラム」「大学コンソーシアム京都」「関西地区FD連絡協議会」「山陰地区FD連絡協議会」「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）」「九州地区大学教育改善FD・SDネットワーク（Q-Links）」など全国の名だたるFDネットワークの代表者が集まり、情報交換・議論をおこなった。関西地区FD連絡協議会は、この2年間の活動で大きく組織化を進め、全国屈指の連携組織となった。

今年度の活動は、初年度の慌ただしさを抜け出して、落ち着いた日常的な営みに変わってきた。この堅実な活動こそが、今後の活動のしっかりした基盤となると見込むことができる。実際に展開された活動については以下で詳しく報告するが、日常的基盤作りの上でとりわけ着目されるべきは、研修マトリックス、研修カレンダー、FD支援システム「MOST（Mutual Online System for Teaching and Learning）」などの作成である。関西地区FD連絡協議会が主催・共催・協賛する研修事業は、事業の種類やテーマにあわせて研修マトリックスによって分類され、研修カレンダーに掲載される。会員校は、これによって参加する研修事業を決定し、自校での研修計画の実施に役立てることができる。さらに、このようにして蓄積された各大学のFDの成果は、MOSTによって、対自的対外的な説明に供され、会員校で共有されるのである。

こうして関西地区FD連絡協議会は、相互研修型FDネットワークの体裁を整えた。この外観の整備が実質的な内的改革に結実するか否かは、ここ数年の関係各位の努力にかかっている。いずれにせよ、今日の高等教育の深刻な危機に際しては、互いに排除しあう競争よりもむしろ、本協議会のように互いに連携しあう協働こそが、求められているのである。

（田中 毎実）

1. 関西地区FD連絡協議会第2回総会

本協議会の第2回総会が、2009年4月25日に京都大学百周年時計台記念館において開催された。本総会では、各ワーキング・グループから2008年度の活動報告および予算報告、2009年度の活動方針および予算計画について報告があり、承認が得られた。2010年度の総会には会員校の組織的FDの取り組みに関するポスター発表の場を設ける提案もなされ、設立初年度に整えた体制を基盤に、今後、大学間の連携をさらに深めていくことが確認された。

第2回総会プログラム

総 会【京都大学 百周年時計台記念館 国際交流ホール I・II】14:30～

進 行：矢野裕俊（大阪市立大学）

開会挨拶：山成数明（大阪大学）

議 事

議 長：田中毎実（京都大学・代表幹事校代表）

- (1) 平成20年度活動報告について
- (2) 平成21年度活動方針について
- (3) 平成20年度決算について
- (4) 平成21年度予算について
- (5) その他

活動事例報告

- (1) 「書くことの指導と評価」

・「関西大学工学部の場合」 池田 勝彦（関西大学）

・「シンポジウムの論点のまとめ」 河崎 美保（京都大学）

- (2) 「組織的FD ポートフォリオを活用したピアレビュー活動の提案」

酒井 博之（京都大学）

- (3) 「携帯電話による授業評価・出欠確認システムの活用について」

福永 栄一（大阪成蹊大学）

閉会挨拶：田中毎実（京都大学・代表幹事校代表）

情報交換会【京都大学 百周年時計台記念館 国際交流ホール III】17:20～

進行役：大塚雄作（京都大学）

第2回総会の議事録を以下に記す。

【総会議事】

総会開催に先立ち、進行役の矢野裕俊氏（大阪市立大学）より、会員校124校（108法人*）のうち64校（54法人）からの参加があり、本総会開催成立のための規定数に達している旨報告があった。引き続き、山成数明氏（大阪大学、常任幹事校）より開会の挨拶がなされた後、規約7条に従い、議事の進行を田中每実氏（京都大学、代表幹事校）と交代した。

*同一法人組織である大学と短期大学（部）を単一機関として計上した数

(1) 平成20年度活動報告について

(2) 平成21年度活動方針について

各ワーキング・グループ（WG）の代表者より、平成20年度活動報告および平成21年度活動方針について順に報告がなされた。FD 情報支援 WG については高橋哲也氏（大阪府立大学）、FD 共同実施 WG については山成数明氏（大阪大学）、FD 連携企画 WG については安岡高志氏（立命館大学）、広報 WG については酒井博之氏（京都大学）、研究 WG については松本和一郎氏（龍谷大学）より報告があり、すべて承認された。

(3) 平成20年度決算について

平成20年度決算案について、中崎明氏（京都大学）より報告があった。議長より、本協議会監査役である大阪工業大学（野村良紀氏）と近畿大学（久世雅之氏）により会計監査が総会開催に先だっておこなわれた旨報告があった後、野村氏（大阪工業大学）より、監査の結果、当年度における経理状況およびすべての財源の使途が正当に使用されていたことを確認した旨、報告があった。平成20年度決算については原案通りで承認された。

(4) 平成21年度予算について

平成21年度予算案について中崎氏（京都大学）より報告があり、原案通り承認された。この後、中崎氏より協議会の会費の納入時期に関する確認がおこなわれた。

(5) その他

議長より、本協議会における「共催および協賛の手続き」および研修事業に関する「研修マトリックス」について提案され、承認された。以上をもって審議事項に関する議事が終了した。

(以上で議事録終了)

活動事例報告の進行を矢野氏（大阪市立大学）に交替し、引き続き、以下の3件の活動事例報告があった。

まず、「書くことの指導と評価」というタイトルで、池田勝彦氏（関西大学）と河崎美保氏（京都大学）よりそれぞれ報告があった。池田氏からは、関西大学工学部で実施されているフレッシュマン・ゼミナールのテーマのうち、学生の日本語能力の育成を重視した授業の取り組みについて紹介があった。対面式の双方向教育をねらいとした少人数制の授業であること、学生の興味をひくため実体験にもとづいた課題を提供していることなどが報告された。河崎氏からは、2008年11月29日に立命館大学衣笠キャンパスにおいて実施された本協議会主催シンポジウム「思考し表現する学生を育てる」について、シンポジウムで提示された論点のまとめに関する報告があった。

次に、酒井博之氏（京都大学）からは、本協議会に加盟する会員校間のFD活動に関する情報共有を目的として、会員校における取り組みを次年度よりポスター発表の形でおこなっていくことが提案された。これと関連して、オンライン上のポートフォリオ作成支援ツールの活用や、会員校間の相互評価の場を設けることが提案された。

最後に、福永栄一氏（大阪成蹊大学）からは、研究WG内の出欠確認研究サブ・グループの活動報告があった。大阪成蹊大学における携帯電話を使った出欠確認システムを先進事例として取り上げ、教員、学生、事務に対する利点が報告された。また、2008年1月に同大学で開催された携帯電話を使った授業評価アンケートに関する見学会についての報告があった。2008年度には、GP等で補助金を申請する計画が発表された。

2. 組織と実施体制

本協議会の会員校数は、2010年2月10日現在で129校（111法人）である。括弧内の「法人」の表記については、同一法人組織である大学と短期大学（部）が単一の機関として入会していることを示す。昨年2009年2月16日時点では、118校（106法人）であり、会員校数は約1年間で11校（5法人）の増加となる。現在の会員校リストを表1に示す。

本協議会の組織図を図1に示す。本協議会の組織体制は、代表幹事校1校、常任幹事校5校、幹事校11校、監査役2校で構成されており現在も組織体制に変化はない（表2）。

本協議会の活動を推進するため、5つのWGとして「FD情報支援WG」「FD共同実施WG」「FD連携企画WG」「広報WG」「研究WG」が設置されている。これらWGの活動については、Ⅲ-2以降で詳述されているのでそちらを参考頂きたい。なお、各WGには、円滑な運営のために、数校の幹事校によって構成される「部」が設置されており（表3）、部の構成校については設立当初より変化はない。WGの構成校について表4に示す。FD情報支援WGと広報WGの構成は、それぞれの部と一致しているが、FD共同実施については、畿央大学、京都文教大学、滋賀県立大学、びわこ成蹊スポーツ大学、平安女学院大学、立命館大学、龍谷大学の7校が、FD連携企画WGについては関西FDパイロット校の藍野大学と京都ノートルダム女子大学が、研究WGについては大阪成蹊大学がWGに加わった。また、研究WG下に3つのサブ・グループ（SG）である授業評価研究SG（主査校：神戸大学）、Web公開授業研究SG（主査校：京都大学）、出欠確認研究SG（主査校：大阪成蹊大学）が設置され、活動を推進している。

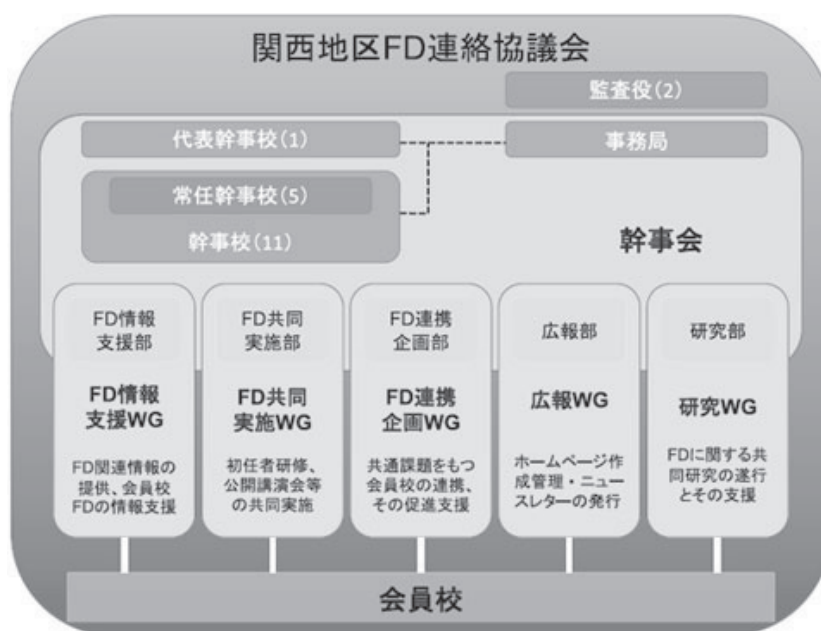


図1. 関西地区FD連絡協議会の組織図

表 1. 会員校名リスト 2010 年 1 月 14 日現在、129 校 (111 法人*)

藍野大学、芦屋女子短期大学、池坊短期大学、追手門学院大学、大阪大学、大阪青山大学、大阪医科大学、大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部*、大阪教育大学、大阪キリスト教短期大学、大阪経済大学、大阪経済法科大学、大阪工業大学、大阪国際大学、大阪産業大学、大阪歯科大学、大阪樟蔭女子大学・大阪樟蔭女子大学短期大学部*、大阪商業大学、大阪女学院大学、大阪市立大学、大阪成蹊大学、大阪成蹊短期大学、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学*、大阪体育大学、大阪電気通信大学、大阪人間科学大学・大阪薫英女子短期大学*、大阪府立大学、大阪薬科大学、大谷大学・大谷大学短期大学部*、華頂短期大学、関西大学、関西医科大学、関西医療大学、関西外国語大学、関西看護医療大学、関西福祉科学大学・関西女子短期大学*、関西学院大学、畿央大学、京都大学、京都医療科学大学、京都外国語大学・京都外国語短期大学*、京都学園大学、京都教育大学、京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部*、京都産業大学、京都女子大学・京都女子大学短期大学部、京都市立芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都橘大学、京都ノートルダム女子大学、京都府立大学、京都文教大学・京都文教短期大学*、京都薬科大学、近畿大学、甲子園大学・甲子園短期大学*、甲南大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸海星女子学院大学、神戸国際大学、神戸市外国語大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女子大学・神戸女子短期大学*、神戸親和女子大学、神戸常盤大学、神戸薬科大学、神戸山手大学・神戸山手短期大学*、堺女子短期大学、滋賀大学、滋賀医科大学、滋賀県立大学、滋賀短期大学、四條畷学園短期大学、四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部*、夙川学院短期大学、聖泉大学、聖母女学院短期大学、摂南大学、相愛大学、帝塚山大学、天理大学、同志社大学、同志社女子大学、常磐会学園大学、長浜バイオ大学、奈良大学、奈良教育大学、奈良産業大学、奈良女子大学、奈良文化女子短期大学、羽衣国際大学、花園大学、阪南大学、東大阪大学、東大阪大学短期大学部、姫路獨協大学、兵庫大学、兵庫教育大学、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部*、びわこ成蹊スポーツ大学、佛教大学、平安女学院大学、武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部*、桃山学院大学、立命館大学、龍谷大学・龍谷大学短期大学部*、流通科学大学、和歌山大学、和歌山県立医科大学、和歌山信愛女子短期大学

*同一法人組織である大学と短期大学（部）が、単一の機関として入会

表 2. 関西地区 FD 連絡協議会の組織体制

代表幹事校（任期 4 年）	京都大学
事務局	京都大学
常任幹事校（任期 4 年）	大阪大学 大阪市立大学 神戸大学 同志社大学 立命館大学
幹事校（任期 2 年）	大阪府立大学 関西大学* 関西学院大学 神戸常盤大学* 龍谷大学・龍谷大学短期大学部 和歌山大学*
監査役（任期 2 年）	大阪工業大学 近畿大学

* は規約施行の最初の特例措置として、3 年任期の幹事校。

表 3. 関西地区 FD 連絡協議会の 5 つの部

FD情報支援部	同志社大学* 大阪府立大学 京都大学
FD共同実施部	大阪大学* 関西学院大学 京都大学
FD連携企画部	立命館大学* 関西大学 神戸常盤大学 京都大学
広報部	大阪市立大学* 和歌山大学 京都大学
研究部	神戸大学* 龍谷大学・龍谷大学短期大学部 京都大学

*は WG の責任校。各部に、代表幹事校（京都大学）が連絡担当として加わる

表 4. 関西地区 FD 連絡協議会の 5 つの WG

FD情報支援WG	同志社大学* 大阪府立大学 京都大学
FD共同実施WG	大阪大学* 関西学院大学 畿央大学、京都文教大学、滋賀県立大学、びわこ成蹊スポーツ大学、平安女学院大学、立命館大学、龍谷大学 京都大学
FD連携企画WG	立命館大学* 関西大学 神戸常盤大学 藍野大学 京都ノートルダム女子大学 京都大学
広 報 WG	大阪市立大学* 和歌山大学 京都大学
研 究 WG	神戸大学* 龍谷大学・龍谷大学短期大学部 大阪成蹊大学 京都大学

*は WG の責任校。各部に、代表幹事校（京都大学）が連絡担当として加わる

3. 幹事校会議

2009年度におこなわれた幹事校会議の議事および資料について以下に挙げる。議事次第および○印を付した資料は、本節資料として示す。幹事校メーリングリストを利用した回議については省略する。

3-1. 幹事会（2009 年度第 1 回）

日 時：平成 21 年 4 月 10 日（金）15:00～

場 所：京都大学本部棟大会議室（本部棟 5 階）

議 題：

1. 平成 20 年度活動報告案について
2. 平成 21 年度活動方針案について
3. 平成 20 年度決算案について
4. 平成 21 年度予算案について
5. その他

（配付資料）

- 資料—1 関西地区 FD 連絡協議会幹事会（第 3 回）出席者名簿
- 資料—2 平成 20 年度関西地区 FD 連絡協議会事業報告〔事務局関連〕
 - 資料—3 関西地区 FD 連絡協議会会員校一覧・大学連絡先（平成 21 年 4 月 1 日現在）
 - 資料—4 関西地区 FD 連絡協議会幹事会（第 2 回）議事録(案) -平成 20 年 7 月 18 日開催-
- 資料—5 FD 情報支援 WG 活動報告・活動方針案
- 資料—6 FD 共同実施 WG 活動報告・活動方針案
- 資料—7 FD 連携企画 WG 活動報告・活動方針案
- 資料—8 広報 WG 活動報告・活動方針案
- 資料—9 研究 WG 活動報告・活動方針案
 - 資料—10 平成 20 年度関西地区 FD 連絡協議会決算書（案）
 - 資料—11 平成 21 年度関西地区 FD 連絡協議会予算書（案）
- 資料—12 関西地区 FD 連絡協議会 共催／協賛の手続きについて
 - 資料—13 関西地区 FD 連絡協議会第 2 回総会プログラム（案）
 - 資料—14 関西地区 FD 連絡協議会第 2 回総会『当日の手順』（案）

（酒井 博之）

関西地区 F D 連絡協議会幹事会（第 3 回）出席者名簿

平成21年4月7日現在

幹事校名	幹事会出席者				備考
	部署名	役職	職種	氏名	
大 阪 大 学	大 学 教 育 実 践 センター		教 授	早 田 幸 政	常任幹事校
大 阪 市 立 大 学	大 学 教 育 研 究 センター	副 所 長	教 授	矢 野 裕 俊	常任幹事校
大 阪 府 立 大 学	総合教育 研究 機構	副 学 生 センター 長	教 授	高 橋 哲 也	
〃	学生センター学務 課	主 事		上 垣 友 香 理	
関 西 大 学	学 事 局	学 次 事 局 長		稲 田 一 豊	
関 西 学 院 大 学	総 合 教 育 研 究 センター	事 務 長		大 西 和 明	
神 戸 大 学	大学教育 推進 機構	大学教育支援 研究推進室長	教 授	米 谷 淳	常任幹事校
神 戸 常 盤 大 学	看 護 学 科	F D 委 員 会 委 員 長	教 授	江 上 芳 子	
同 志 社 大 学	教 育 開 発 センター	所 長	教 授	山 田 礼 子	常任幹事校
立 命 館 大 学	教 育 開 発 推 進 機 構		教 授	沖 裕 貴	常任幹事校
〃	教 学 部 教 育 課 開 発 支 援 課	課 長		山 本 勉	
龍 谷 大 学 ・ 龍 谷 大 学 短 期 大 学 部	大学教育開発セン ター	セ ン タ ー 長	教 授	松 本 和 一 郎	
和 歌 山 大 学	教 育 学 部	教 授		菊 川 恵 三	
京 都 大 学	高 等 教 育 研 究 センター 開 発 センター	セ ン タ ー 長	教 授	田 中 毎 実	議長校(代表幹事校)
〃	〃		教 授	大 塚 雄 作	
〃	〃		教 授	松 下 佳 代	
〃	〃		准 教 授	田 口 真 奈	
〃	〃		准 教 授	酒 井 博 之	
〃	〃		准 教 授	及 川 恵	
〃	教 育 推 進 部	部 長		中 崎 明	

■ 平成20年度関西地区FD連絡協議会事業報告〔事務局関連〕

年月日	会議等	内容	備考
20.04.26	総会	<p>関西地区FD連絡協議会設立総会開催</p> <p>(第1部)</p> <p>開会挨拶</p> <p>①協議会設立の趣旨と経緯</p> <p>②協議会規約と組織</p> <p>③「関西地区FD連絡協議会」規約(案)について</p> <p>④代表幹事校、幹事校及び監査役の選出について</p> <p>⑤会費について</p> <p>⑥その他</p> <p>(第2部)</p> <p>①祝辞(文部科学省高等教育局大学振興課長 中岡 司氏)</p> <p>②記念講演(東京大学名誉教授 天野 郁夫氏)</p> <p>閉会挨拶</p> <p>情報交換会</p>	<p>会場:芝蘭会館</p> <p>参加会員校:104校</p> <p>総会出席者:162名</p> <p>◆規約の決定</p> <p>◆会員校の承認(104校)</p> <p>◆代表幹事校:京都大学</p> <p>◆事務局:京都大学</p> <p>◆幹事校:大阪大学・大阪市立大学・大阪府立大学・関西大学・関西学院大学・神戸大学・神戸常盤大学・同志社大学・立命館大学・龍谷大学・和歌山大学(11校)</p> <p>◆会費:年会費1校あたり2万円</p> <p>情報交換会出席者:98名</p>
20.06.13	幹事会	<p>関西地区FD連絡協議会幹事会(第1回)開催</p> <p>①常任幹事校の確認について</p> <p>②協議会への入会等について</p> <p>③平成20年度活動方針について</p> <p>④平成20年度予算について</p> <p>⑤その他</p>	<p>会場:京都大学本部棟大会議室</p> <p>◆常任幹事校:大阪大学・大阪市立大学・神戸大学・同志社大学・立命館大学</p> <p>◆常任幹事校の任期:4年(4年後の4月25日まで)</p> <p>◆幹事校の任期(2年):大阪府立大学・関西学院大学・龍谷大学</p> <p>◆幹事校の任期(3年):関西大学・神戸常盤大学・和歌山大学</p> <p>◆短期大学を併設する大学の1校化:10校について承認</p> <p>◆新規入会:4校(畿央大学・堺女子短期大学・四條畷学園短期大学・兵庫大学)</p> <p>◆規約第10条に基づくワーキング・グループに関する申合せ</p> <p>◆関西地区FD連絡協議会会費取扱要領の確認</p> <p>◆平成20年度予算書の決定</p>
20.06.26	(全会員校)	関西地区FD連絡協議会会費の納入について(お願い)	
20.07.18	幹事会	関西地区FD連絡協議会幹事会(第2回)開催	会場:京都大学時計台記念館会議室Ⅲ

		①平成20年度活動計画について ②その他	◆活動計画の決定 ・FD情報支援WG・FD共同実施WG・FD連携企画WG・広報WG・研究WG ◆新規入会：京都ノートルダム大学
20.08.08	(全会員校)	平成20年度関西地区FD連絡協議会活動計画について(通知)	◆規約第10条に基づくワーキング・グループに関する申合せ(周知) ◆各ワーキング・グループ活動計画案(周知)
20.10.25		これからの学士課程教育(FD共同実施WG)	関西学院大学との共催 会場：関西学院大学上ヶ原キャンパスG号館 参加者：70名
20.11.04	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会入会申し込みについて	◆新規入会：甲南女子大学・帝塚山大学・奈良大学(4／1付)・大阪樟蔭女子大学短期大学部
20.11.19	幹事会【報告】	関西地区FD連絡協議会(大学／短期大学(部)併設校)申し込みについて	◆短期大学との1校化：神戸女子大学／神戸女子短期大学
20.11.29		第1回関西地区FD連絡協議会主催 シンポジウム(FD連携企画WG)	会場：立命館大学衣笠キャンパス以学館 参加者：157名
20.12.02	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会入会申し込みについて	◆新規入会：大阪キリスト教短期大学
21.01.08	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会入会申し込みについて	◆新規入会：藍野大学
21.01.23	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会入会申し込みについて	◆新規入会：京都女子大学／京都女子大学短期大学部
21.02.10	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会入会申し込みについて	◆新規入会：兵庫教育大学・京都府立大学(4／1付)
21.02.24	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：京都光華女子大学
21.03.19		第2回関西地区FD連絡協議会主催 公開研究会(研究WG)	会場：京都大学時計台記念館ホール 参加者：234名
21.04.10	幹事会	関西地区FD連絡協議会幹事会(第3回)開催	
21.04.25	総会	関西地区FD連絡協議会第2回総会開催	

2009. 4. 10 (金)

FD 情報支援WG 活動報告・活動方針案

山田礼子 (同志社大学)、高橋哲也 (大阪府立大学)、溝上慎一 (京都大学)

1. 昨年の活動と反省

□ 講演講師、シンポジウム・ワークショップのプログラムに関する情報支援の活動

* 留意点：できるだけ関西 FD の参加校の相互貢献、相互情報交換となるように情報支援のしかたを考慮する。

> 4 件の依頼

No	Date	内容
1	1028-2008	「全入時代の大学生の傾向と対策」講演講師
2	1201-2008	「PDCA サイクルと短期大学教育研修」講演講師
3	1213-2008	「初年次教育及び学士課程教育」講演講師
4	1217-2008	「大学授業の実践的ノウハウ」ワークショップ講師

□ 広報について

- 『ニューズレター創刊号』(2008 年 11 月 12 日) を刊行したあと、依頼が殺到したが、その後は音沙汰がない。2009 年度の課題の一つは、広報の充実に努めることである。

□ 情報提供に関するルール作り (2008 年 11 月作成)

- (1) 上記の推薦について、関西 FD は責任をもちません。依頼者は上記の情報を参考にして、講師の所属する大学、講師の活動を HP や著書等で簡単にでも調べ、最後の依頼には自己責任をもってこなってください。
- (2) 講演内容、結果についても、関西 FD は責任をもちません。
- (3) 推薦した先生に依頼をされるときには、「関西地区 FD 連絡協議会から推薦を受けた」とはお話にならないで下さい。あくまで、依頼者の希望としてご依頼をお願いします。
- (4) 推薦講師のメール等は個人情報ですので、教えて差し上げられません。依頼に関しては大学の代表電話等を調べてご依頼ください。

□ 2009 年度の課題：

2008 年度の活動を実施するなかで、教義の FD を越えてさまざまなテーマに関する講師情報が求められることがわかった。しかし、あるテーマでは〇〇先生が活躍されている、という情報を持っていたも、その先生を実際に知らなければなかなか推薦できないのも事実であった。その意味で、2009 年度

は、自身の関心を越えて幅広くシンポジウムやイベント等に参加し、講師情報を集める必要性があると感じられた。

また、FD や広く教育改革に関連して講演をおこなっている講師のリストを、HP から拾って作成中である。これも情報支援活動の一つのリソースとして活用していきたい。

2. 2009 年度予算申請：

情報収集旅費 200,000 円（50,000 円／回×4 回分）

以上

FD 共同実施WG 活動報告・活動方針案

FD 共同実施 WG は、初任者研修の企画立案をはじめ、会員校が共同で実施する活動を行っている。WG の実施体制は、大阪大学（責任校）、関西学院大学、京都大学である。

1. 20 年度の活動報告

1-1. 初任者研修実施のための基礎データの収集

FD 情報支援 WG との共同により、関西地区の 4 年制大学および短期大学を対象とし、各大学の FD 活動に関する資料・情報収集のためのアンケート調査を実施した。調査では、多くの大学、短期大学の協力により、FD に関する研修会、講演会、ワークショップ等の実施状況（プログラム内容、実施主体）など、今後の FD 活動におけるニーズや連携を考える上で貴重な情報が得られた。

1-2. 講演会等の共同実施

本年度は、公開研究会や講演会等の協賛、共催イベントを実施した。共同実施 WG において、本年度の新規の共同企画としたものが、10 月 25 日に関西学院大学の主催で行われた公開講演会であった。講演会には 100 名を超す参加者が集まった。

「これからの学士課程教育－大学に何が求められているのか－」

主催：関西学院大学 関西学院大学総合教育研究室

共催：関西地区 FD 連絡協議会

プログラム

【基調講演】

義本 博司（文部科学省大学振興課長）

【パネルディスカッション】

報告：川嶋太津夫（神戸大学教育推進機構教授）

西之園晴夫（NPO 法人学習開発研究所代表）

西 和彦（須磨学園学園長）

浅野 考平（関西学院大学副学長）

司 会：矢倉 達夫（関西学院大学教務部長）

総合司会：中條 道雄（関西学院大学総合教育研究室長）

（敬省略）

2. 21 年度の活動方針案

2-1. 共同実施 WG の活動方針

関西 FD 全加盟大学の初任者を対象とした、初任者研修を共同企画、共同実施する（2011 年春第 1 回開催予定。）

2-2. 共同実施 WG の活動計画

単なる How to にとどまらないような、理論を抑えた初任者研修プログラムを開発するため、コアメンバーにて数度の勉強会を行う。コアメンバーは、共同実施 WG に加えてメーリングリストで募集する。場合によっては 20 年度に実施したアンケート調査の結果を踏まえて WG の方から声かけを行って組織する。

2010 年 3 月 17 日（フォーラム前日）には、初任者研修担当者ワークショップを実施する。

2-3. 共同実施 WG の予算案

- ・ 勉強会開催費（資料代・お茶代）（2,000 円×5 回＝10000 円）
- ・ 初任者研修担当者ワークショップ実施費用（計 176,000 円）
 - 講師旅費（関西 3 名） 6,000 円
 - 講師謝金（関西 3 名） 30,000 円
 - 講師旅費（関東 1 名） 40,000 円
 - 講師謝金（関東 1 名） 20,000 円
 - アルバイト 50,000 円
 - 資料代 20,000 円
 - 消耗品（DVD 等） 10,000 円

以上，計 186,000 円

FD 連携企画 WG 活動報告・活動方針案 2008 年度活動報告

2009.4.10 幹事会

立命館大学、関西大学、神戸常盤大学、京都大学

1. 組織

FD 連携企画ワーキンググループ(WG)は、幹事校で構成される FD 連携企画部の他に、2009 年 3 月に藍野大学・理学療法学科が関西 FD パイロット校に登録し、2009 年 3 月末現在、5 校で構成されている。

(1) FD 連携企画部

常任幹事校：立命館大学（担当：安岡高志、鳥井真木） …責任校

幹事校：関西大学（担当：池田勝彦、稲田一豊）

幹事校：神戸常盤大学（担当：江上芳子、安富剛作）

代表幹事校：京都大学（担当：松下佳代、石川裕之、河崎美保） …事務局

(2) FD 連携企画 WG

上記 4 校＋藍野大学・理学療法学科（担当：平山朋子）

(3) 関西 FD パイロット校

神戸常盤大学、藍野大学・理学療法学科（2009 年 4 月現在）

2. 活動内容

(1) 目的と特色

FD 連携企画 WG の目的は、関西地区 FD 連絡協議会の会員校のうち、共通のテーマ（問題別、アプローチ別、組織別、ディシプリン別など）を抱える大学がグループを作り、協働で問題への対処に取り組むことである。そのため、一回限りのイベントを実施するのではなく、継続的に情報交換しながら、実質的な教育改善・FD を進めるための緩やかなコミュニティを形成することをめざしている。

FD 連携企画 WG には、ニーズの高いテーマに関連して自校の FD に取り組む会員校を「関西 FD パイロット校」として支援するという特色がある。2009 年 3 月現在、神戸常盤大学と藍野大学が関西 FD パイロット校となっている。

(2) 活動計画

FD 連携企画 WG では、以下のようなプロセスで活動を展開していく予定である。

- ① 特定のテーマについてシンポジウムを開催する。
- ② シンポジウム参加校を中心にグループを形成する。
- ③ グループ内での先進校の取組事例の学習や自校での試行を WG が支援する。
- ④ グループは、関西 FD のホームページ・ニュースレターや大学教育研究フォーラム

等で活動報告を行う。

- ⑤ 毎年、①～④を繰り返しながら、大学間連携を拡大・進化させる。

(3) 2008年度の活動報告

FD 連携企画ワーキンググループでは、2008 年 11 月 29 日に立命館大学衣笠キャンパスにおいて、第 1 回関西地区 FD 連絡協議会主催シンポジウム「思考し表現する学生を育てる—書くことをどう指導し、評価するか?—」を開催した。シンポジウム I は会員校による事例報告、II は関連研究の報告という 2 部構成で、以下のタイムテーブルにそって進めた。

14 時 00 分～ 挨拶と趣旨説明

柳澤 伸司（立命館大学産業社会学部教授、教学部副部長）
 田中 每実（京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授、
 関西地区 FD 連絡協議会代表幹事校代表）
 安岡 高志（立命館大学 教育開発推進機構 教授、
 関西地区 FD 連絡協議会 FD 連携企画部責任校代表）

14 時 15 分～ シンポジウム I —関西地区 FD 連絡協議会会員校による事例報告—

司会：安岡 高志

「神戸常盤大学における初年次教育の課題」

大野 仁（神戸常盤大学 保健科学部 教授）

「立命館大学文学部における初年次教育としての『リテラシー入門』と FD」

米山 裕（立命館大学 文学部 教授・副学部長）

「フレッシュマン・ゼミナール～工学を学ぶための導入教育～」

池田 勝彦（関西大学 化学生命工学部 教授）

15 時 40 分～ シンポジウム II —関連研究に学ぶ—

司会：松下 佳代（京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授）

「『コピペ』問題の本質」

杉光 一成（金沢工業大学大学院 工学研究科 教授）

「『書くこと』で学生はどう育つのか？」

西垣 順子（大阪市立大学 大学教育研究センター准教授）

〔指定討論〕

「Writing Across the Curriculum と FD」

：書く力考える力を育む学士課程カリキュラムを目指して」

井下 千以子（桜美林大学 心理・教育学系 教授）

参加者は157名にのぼり、興味深い発表と活発な議論が行われた（詳細については、資料 1 参照）。参加者からの感想を紹介することで、シンポジウムの成果の一端を伝えることにしよう。

＊

＊

初年次教育を進めるのは、現場の教員には負担感があります。そのため、初年次教育運営担当者として、アイデア不足に悩んだり反発にあったりして、正直なところ、学部内では孤独感を持っていました。先日のシンポに参加して、シンポジウムⅠで他学の取り組みに共感し、シンポジウムⅡで自分たちの取り組みを俯瞰するような視点を与えていただき、さらにシンポジウムを通じての熱心な参加者に勇気づけられ、とても良い経験になりました。大学間の連携というのは、FDに取り組んでいる教員の相互サポートという大きな意味もあると実感しました。その意味で、日常的に協力し合える地域での取り組みはとても大切なものだと思います。本当にありがとうございました。

—— 米山裕氏（立命館大学、シンポジウムⅠ 報告者）

シンポジウムⅠでは、学部4年間を視野に入れた基礎教育、キャリア教育の理論づけを学ぶきっかけになり、勤務校での基礎演習のシラバス造りの参考にもなりました。シンポジウムⅡでは、他大学でも同じ悩みを持っているのがわかりました。その意味で最大の収穫は、これだけたくさんの方が、このシンポジウムに参加されているのを知れたことです。

—— フロアからの意見（事後アンケートより）

具体的な事例がたくさん出てきたので参考になりました。多くの課題を改善しようとしている大学教員や職員が多いことに気づき、自らの問題意識の高まりを感じましたし、FDに取り組もうという意欲が湧きました。ただ、お一人ずつの先生方の時間が不足しているように感じたので、次回からは発表者の数を減らし、内容を深めてはどうかと思います。

—— フロアからの意見（事後アンケートより）

＊

＊

事後アンケートの結果や参加者の感想をふまえて、本ワーキンググループでは、今年度のテーマを継承し発展させるために、来年度もこのテーマでイベントを開催することを予定している。シンポジウムではなく、パネルディスカッションあるいはワークショップの形式をとることによって、よりインテンシブでインタラクティブなイベントにしたいと考えている。

第 1 回関西地区 FD 連絡協議会シンポジウム

「思考し表現する学生を育てる 一書くことをどう指導し、評価するか」

主な論点のまとめ

●シンポジウム I ー関西地区 FD 連絡協議会会員校による事例報告ー

■各話題提供から明らかになった論点

【神戸常盤大学の事例より】(大野 仁 教授)

- ・ 学生の学力、これまでの学習経過（何を学んできたか）を把握し、これに基づき、学生に足りないものを補う教育を行う必要がある
 - たとえば、小、中、高等学校で批判的に考える習慣がどの程度達成されているかの把握や、批判的思考力を養うためにどういうことをすればよいかの検討
 - 初年次教育の必要のない学生に同じ教育を与えてよいのか（学生からの異議あり）
- ・ 担当教員の専門の違いから、教育内容や評価の仕方が異なってしまうが、同じレベルにそろえる必要がある
- ・ いくつかの科目を初年次教育の科目群として、連絡調整をとりながら進める必要がある

【立命館大学の事例より】(米山 裕 教授)

- ・ 文学部の共通科目であっても専攻ごとにレポート課題が異なる→リテラシー運営委員会で調整
- ・ 教員は作業量が多く、成果の実感が伴わない

【関西大学の事例より】(池田 勝彦 教授)

- ・ 最初にいかに学生の動機づけを高めるかが重要となるが、この点に教員間で個人差がある。教員の個性を生かした教材を用意し、学生の反応をみて変更していく必要がある。

■質疑応答から明らかになった論点

- ・ 初年次教育には多くの教員の動員が必要になる。教員間の連携についてどのような取り組みをしているか？

(大野) 事前打ち合わせを 2 回（これのみでは不十分）。一定の内容を教えるよう教科書を指定する。成績評価の基準を細かく指定することで教員の裁量の違いがでないよう配慮

(米山) 運営委員会で課題をコントロールしている。ただし教員の創意工夫の機会を阻んでいるのではないかという批判もある。最終課題については教員の案通りとした。統一性をもたせつつ、教員の創意工夫を生かすこととのバランスをとるため試行錯誤している。

(池田) 各教員が作ったコンテンツを全員がみる。終了後アンケートをみて反省会を行う。

・ 採点には時間がかかるが、どのようにTAの分担を入れているのか

(米山) 下読みをして日本語のスキルを添削する。鉛筆でチェックし、教員が評価し直す。大学院生にとっても訓練になることを期待している。アンケートではやりがいを感じている。TA は、添削作業の中で学生が伸びたと手ごたえを感じている。これに対して専任教員の満足度は高くない点が課題。

・ 思考し表現する学生とは、いずれの大学でも情報活用能力の3点に沿っているようだが、3 点目の倫理的側面の位置づけが見えなかった。これについての取り組みは？

(大野) 個人情報保護等については別の機会に行っている。初年次教育ではインターネットからの引用などについて扱っている。

(米山) 情報倫理について 1 時間とっている。現在設計中の科目では、図書館の図書持ち出し等、扱うべき案件を検討開始したところである。

(池田) 初年次教育としては行っていない。「技術者倫理・工学倫理」において行っている。専門家しか知らないことがあるため、倫理が必要になると説明している。個人的には初年次教育でも倫理観を扱うべきとは感じている。

・ 神戸常盤大学、立命館大学では、書くことをレクチャ形式で行っている。自分の経験では 40 名が限界と感じているが、一斉指導形式で書くことを指導する際のクラスサイズについて何か経験知はあるか？

(大野) 現在 40 名クラスだが、確かに少ない方が望ましい。添削しやりとりできる限界が 40 名かと考えられる。

(米山) 120～130 名の講義を行っている。講義するのみでは動機づけが上がらない。毎回授業の中で提出物を出させて、目的意識を持って聞くよう配慮している。クラスサイズを下げようとする講師派遣などの必要になる。現在のサイズであっても、以前と比べれば半分のサイズになったことで効果は上がった。

・ 初年次教育で扱う内容は、専門教育を行ってからの方が効率的である側面も考え得る。2 年次、3 年次での指導はどのようにしているか？

(大野) 確かに初年次のみでは形式の模倣だけで終わってしまうおそれがある。学科全体で初年次教育に関する合意がとれないと、身に着かないだろう。2 年次以降の授業の中で実践的に生かす取り組みが必要だ。

(米山) 2 年次以降、様々な講義、演習において継続的にレポートを書く指導を行うことは可能である。リテラシー教育の目的は、キックスタート。以降は、学部で手分けして指導するという方針。

(池田) 初年次教育がなければ、2 年次から始まる実験のレポートや卒論が日本語のチェックになってしまい、遅すぎるおそれがある。初年次で形式を身につけさせることは重要

・ 15 回の授業を 1 名の担当で担当する方法、分担する方法の長所、短所は？

(大野) 質疑応答能力を求めている授業（グループワーク）では、学生の発言機会の確保のため少人数クラスである必要。そのため、クラスを細分化し、担当者を複数用意してい

る。講義のみであればクラスサイズを大きくして、担当者 1 名でも可能。

(米山) 現在は、4 回の書き方講座は日本文学を専門とする教員が担当することになっている。こうした専門知識を持った教員のノウハウや文学部の各専門の教員の作成した素材をテキストに結集させ、日本文学を専門としない教員であっても担当できるようにすることを理想としている。1 年次に達成すべきライティングの目標設定を学部全体で議論しながら、3～4 年の間に実現したいと考えている。このテキスト作成のための議論はそれ自体を FD につながる。

(池田) 5 テーマのうち、1 テーマを 1 名の教員が担当する。学生はサブグループに分け、5 名の教員の授業をローテーションしていく方法をとっている。

・ 担当教員の協力体制の築き方

(大野) 初年次教育の担当者には、非協力的な教員も巻き込むためのコーディネート能力が要求される。

(米山) 初年次教育のうち、ライティングに関しては協力が得られやすいが、キャリアディベロップメントを扱うことへは教員の間でも抵抗が多い。本来の授業時間より早く終わっているクラスもあるようだ。全員が担当できるものでもないかもしれない。早稲田大学の文学部の初年次教育では、執行部が指名した教員に担当させているようだ。できるだけ多くの教員が担当できるよう取り組むことが課されている使命と言える。

(池田) 工学部の教員が読むこと、書くこと、プレゼンテーションの専門家といえるのか、本当に教育効果が上がっているのか、という疑問がある。担当している若い教員の負担を軽減しながら、効率よく行うことが現在悩んでいる課題である。

■まとめ

(安岡)

・ 教員、TA のレベルをいかに合わせ、維持するかが共通の課題。アメリカの高等教育における最大の発明品は TA といわれているように、いかに TA を効果的に活用するかにかかっている。

・ 改革をする上で、効率のよい方法はないのではないかな

●シンポジウムⅡ ― 関連研究に学ぶ ―

■各話題提供から明らかになった論点

【コピー問題について】(杉光 一成 教授)

・ 問題にすべきコピーとは、「コンピュータのコピー&ペースト機能を用いて、他人の文章等を丸写しし、自分の文章等と詐称する行為」である (D タイプ)。コピー問題に対しては、スピード違反の取り締まりのように、教育だけでは十分ではない。現在の学生には、D タイプのコピーの問題に気づかせること自体が教員の想像を超えて困難な可能性があり、取り締まる道具の存在がそれを知らせる一つの手段となり得る。取り締まりの効果は見えに

くいが、たとえば、捕まりたくないという理由から違反をしないことによって危険な運転を防ぎ、ドライバーのためになっていることがある。同様にソフトがあることによって、コピペをやめよう自分で考えて書こうという学生がいれば、結果的には学生の学習機会を与えその学生のためにもなっているのではないか。教育の重要性を否定するものではなく、ソフトの果たす役割もあるのではないか。

【発達の観点から】(西垣 順子 教授)

・書くことによって過去の経験と、今学んだこと、将来の展望を統合し、再構造化、相対化することができる。高水準のリテラシーの発達・教育として求められることは、技術や批判的思考力の育成のみならず、書くことを通じた自己認識、再認識・相対化を支援すること。文章表現に関する授業があれば済むわけではなく、カリキュラムに組み込んでいく必要がある。感じたこととレポートに表現できることとのギャップに苦しんだり、書くことで気づいたという経験が重要である。レポートの内容を深めるために、ディスカッションを取り入れる試みがある。

・読み書き能力について小学校までの研究は豊富だが、中高が抜けている。大学になって問題化しているという現状がある

・非言語的領域の知能を生かすための言語的領域の知能の育成といった、学生の特性に配慮する視点が重要

【指定討論】(井下 千以子 教授)

・初年次教育は重要であるが、それを学士課程、一生涯のスパンに位置づける必要→カリキュラム全体にわたって書くことを指導する (Writing across the Curriculum)

・特に、大学における書く力、考える力とは「ディシプリンでの学習経験を自分にとって意味のある知識として再構造化する力」。今の初年次教育ではディシプリンの比重が小さい

・Writing across the Curriculum のためには教員間の理解と協力つまりFDが必要になってくる。ライティングセンターを構想するという考え方もあるが、教員同士が学び合うことが現実的。

■質疑応答から明らかになった論点

・コピペに関して、学生からすれば一生懸命探した行為がなぜ評価されないのかと思っているかもしれない。コピペを評価することの方が手っ取り早いかもしれない。なぜそれをコピペしたのかが書かれていればプラスになるという指導など、プラスに転化する教育活動もありえるのでは？

(杉光) 確かにそういう方法もある。ソフトを使わずにやれる方法があればそれがよい。教育の部分重視することも大事。ただし、「自分はこう考える」と書いた文章そのものがコピペであるということが問題だと考えている。完全に意図的に行っている。見つけたコピペに対しては、評価し引用の表記の仕方を教えるという方法で対応できるが、そうでない部分があるのではないかと考えている。

・コピペ検出ソフトでは、語彙的な言い換え、構文的な言い換えにどのくらい対応できているのか？

(杉光) 形態素解析という技術を使用している。単純に「てにをは」や単語の順を変えている場合でも捕捉できる

・ 学生側のコピペのやり方のパターンなど類型化された知識はあるのか？

(杉光) 「てにをは」を変える, 「である」を「です, ます」に変えるなどあるようだ。翻訳ソフトにかけていったん違う言語に変えてさらに翻訳するという方法も聞いたことはある (有効かは別として)

・ Writing across the Curriculum について, 各教員の課題の出し方, フィードバック(評価, 指導)の仕方全体を見渡しているセクションがないとできないのでは? 例に取り上げられていたスタンフォードや桜美林大学においては, 実際にそうしたチェックをしているのか?

(井下) 確かに, 見渡す人, デザインしコーディネートする人, ライティングの専門家でありかつディシプリンをもった人が現実的には必要になってくるだろう。ライティングセンターが有効であるのは, ディシプリンに特化した書き方を短期間に身につける上でのこと。研究者としての学術論文の書き方の習得ではなく, 考える力のある学生が育っていくためには, ライティングに特化した専門家ではなくディシプリンが重要である。スタンフォード大学では, ライティングの先生が 1 年次の科目を担当し, 専門の先生とのやりとりを頻繁に持っている。重要なのは, 効率的であること, 強いリーダーシップをとることではなく試行錯誤することではないか。

(西垣) Writing across the Curriculum のポイントは, すべての授業でしっかり頭で考えることを学生に促すこと。

■まとめ

(松下)

- ・ 初年次教育と専門教育の関連性
- ・ 誰がライティング指導を担当するのか
- ・ FDとどうつなげるか
- ・ 今回はあまり議論に入らなかったが評価はどうするのか

2009 年度活動方針案

2009.4.10 幹事会

立命館大学、関西大学、神戸常盤大学、京都大学

1. 組織

(1) FD 連携企画部

常任幹事校：立命館大学（担当：安岡高志、山本勉） …責任校

幹事校：関西大学（担当：池田勝彦、稲田一豊）

幹事校：神戸常盤大学（担当：江上芳子、安富剛作）

代表幹事校：京都大学（担当：松下佳代、石川裕之、河崎美保） …事務局

(2) FD 連携企画 WG

上記 4 校＋藍野大学・理学療法学科（担当：平山朋子）

(3) 関西 FD パイロット校

神戸常盤大学、藍野大学・理学療法学科（2009 年 4 月現在）

＊2009 年度中に、パイロット校をさらに 1～2 校追加できればと考えている。

2. 活動方針

(1) WG の活動方針

一回限りのイベントではなく、継続的に情報交換しながら、協働的に教育改善・FD を進めるための緩やかなコミュニティ形成を支援する。テーマの一般化を急がず、できるだけ各大学のローカリティに根ざしたコミュニティとなるようにする。また、できるだけ、まだ組織化されていないテーマを掘り起こすようにする。

(2) 本年度の活動方針

①昨年度のテーマの継承・発展

昨年度の第 1 回シンポジウムは参加者 157 名で、アンケート結果でも高評価であったが、「時間をもっと長く」「このテーマを継続してもっと掘り下げてほしい」といった要望があった。そこで、本年度は同一のテーマ「思考し表現する学生を育てる―書くことをどう指導し評価するか？―」でワークショップを行う。

②新しいテーマでの連携

関西 FD パイロット校として、現在、2 校が活動しているが、パイロット校の活動は必ずしも上のテーマに制約されない。

例えば、藍野大学・理学療法学科は、OSCE リフレクション法（*OSCE＝客観的臨床能力試験）という独自の方法で、学生の学びに根ざした自生的な FD 実践を展開しており、同じく医療系である神戸常盤大学との間で、交流も始まりつつある。

本 WG で設定するテーマは、<できるだけ大学の種別や規模、学問分野の違いを問わず、

多くの大学や大学教員が共通して抱えているテーマであり、かつ、学問分野の違いなどを反映して多様なアプローチが可能なテーマであることが望ましいが、「学生の学びに根ざした FD」はそのようなテーマであるといえるだろう。

こうしたテーマでのパイロット実践や連携を、本 WG ではさらに支援していきたいと考えている。

③WG 内でのコミュニケーション

WG 内でのコミュニケーションには現在、電子メールを用いているが、電話会議用のツール（NTT リアルトーク）を購入したので、電話会議も可能である。昨年度以上にコミュニケーションを活性化していきたい。

3. スケジュール

- | | | |
|--------|-----|--|
| 2009 年 | 4 月 | 関西地区 FD 連絡協議会第 2 回総会
活動報告（安岡先生）、活動事例報告（池田先生、河崎さん） |
| 2010 年 | 1 月 | 第●回関西地区 FD 連絡協議会主催イベント ワークショップ
（予定） 「思考し表現する学生を育てる一書くことをどう指導し評価するか？—Ⅱ」
場所：関西大学（予定） |
| 2010 年 | 3 月 | 大学教育研究フォーラムで、関西 FD パイロット校の活動報告 |

4. 予算

(1) 支出

- ・ワークショップ（ポスター・チラシ印刷代、講師の謝金・旅費、冊子印刷代、文房具代など）

(2) 収入

- ・ワークショップ（参加費）

＊参考 第 1 回シンポジウムの参加費……会員校 500 円、非会員校 2,000 円

広報 WG 活動報告・活動方針案

1. 広報 WG の目的と組織体制

1-1. 目的

広報 WG は、本協議会に関する広報業務をおこなう。具体的には、①ホームページの更新、維持管理、②ニュースレターの発行（年2回）、③メーリングリストの管理、④会員校向けイベント等案内通知、を担当する。

1-2. 組織体制

広報部は以下のように構成されており、2009年4月現在、部とWGの構成員一致している（敬称略）。

- ・大阪市立大学（矢野裕俊）・・・責任校
- ・和歌山大学（菊川恵三）
- ・京都大学（酒井博之、中村夕衣、笹尾真剛）・・・連絡担当

2. 2008 年度活動報告

2-1. ニュースレターの発行

ニュースレターを年2回程度発行する計画となっているが、初年度は、2008年11月に創刊号を発行した（図1）。800部作成し、全会員校宛に送付した（非会員校には勧誘目的で1部ずつ送付）。また、PDF版を協議会ウェブサイトへも掲載し、一般公開している。



【創刊号目次】

- ・ 関西地区 FD 連絡協議会設立にあたって
- ・ 設立総会
- ・ 協議会組織
- ・ 祝辞
- ・ 記念講演
- ・ 設立総会アンケート結果
- ・ 寄稿文 1
- ・ 寄稿文 2
- ・ イベントカレンダー
- ・ ワーキング・グループからのお知らせ
- ・ 第1回関西地区 FD 連絡協議会シンポジウム
- ・ 事務局より

（別紙）関西地区 FD 連絡協議会規約

図1 関西地区 FD 連絡協議会 ニュースレター創刊号

2-2. ウェブサイトの構築、管理、運営

協議会のウェブサイト（<http://www.kansai-fd.org>）を、2008 年 11 月に立ち上げ、更新、維持管理をおこなった。また、協議会のロゴを作成した。



協議会ロゴ

協議会概要

プライバシーポリシー	協議会について
代表幹事校挨拶	組織
WG の設置及び活動方針	
WG に関する申合せ	規約

活動

活動記録（主催、共催イベント、WG の活動等）
活動記録（総会、幹事会等）
各種報告

ワーキンググループ

ワーキンググループ
ワーキンググループについて
各ワーキンググループの活動
研究 WG
活動スケジュール
活動スケジュール

事務局

事務局	会費の支払い	
会費取扱要領	各種手続き	FAQ

刊行物

報告書	ニュースレター
-----	---------

リンク

会員校及び会員校内の高等教育関連機関
国内の FD ネットワーク機関

図 2 関西地区 FD 連絡協議会 ウェブサイト

2-3. メーリングリストについて

幹事校や各 WG および研究サブグループにおける連絡用、全会員校向けの案内用のメーリングリストを作成し、管理している。

3. 2009 年度活動方針案

3.1 ニュースレターの発行

本協議会のニュースレターを 2 度発行する

・第 2 号（7 月頃）

内容（案）：2009 年度総会報告、活動報告、会員校取り組み紹介など

・第 3 号（1 月頃）

内容（案）：活動報告、会員校取り組み紹介など

3-2. その他の活動

他の部や WG と連携しながら、引き続き「ホームページの更新、維持管理」「メーリングリストの管理」「会員校向けイベント等案内通知」をおこなう。

2008 年度の反省を踏まえ、今年度は特に以下を充実させる予定である。

- ・ホームページやニュースレターの内容を豊富にするため、会員校や各 WG からのイベント情報の取得や報告のフローを明確化し、必要であれば入力フォームを準備するなどの措置を講じる。
- ・ニュースレターの掲載記事依頼先が幹事校に偏っており、今後、より広く会員校の取り組みを共有できるように努める。

4. 2009 年度予算（案）

◆2009 年度予算（案） 855,070 円

1) ホームページ関連

- ・ドメイン維持費 年額 6,720 円
- ・サーバー維持費 年間 50,400 円

2) ニュースレター関連

- ・総会のテープ起こし、要約作業 89,250 円
- ・ニュースレター印刷・発送費（800 部・217 箇所）×2 回 708,700 円

参考：

◆2008 年度決算 1,135,479 円（内、本協議会会費から支出 354,350 円）

1) ホームページ関連

- ・サイト・ロゴ作成費 661,500 円*
- ・ドメイン取得、サーバー維持費（9 月以降） 30,379 円*

2) ニュースレター関連

- ・総会のテープ起こし、要約作業 89,250 円*
- ・ニュースレター印刷・発送費（800 部・217 箇所） 354,350 円（→関西 FD より）

（*：京大で負担）

以上

研究 WG 活動報告・活動方針案

I. 研究 WG の目的と体制

(1) 研究 WG の目的

- 関西地区 FD 連絡協議会（関西 FD）において、共同して研究すべき課題に関して、研究サブグループ（研究 SG）などを設置し、共同研究を企画・推進する。
- 研究 WG は、各研究 SG の参加者の中から主査を指名し、活動が円滑に進むようにサポートする。
- 共同研究の成果は、関西 FD のワークショップや各種フォーラム、ホームページ（HP）などで広く共有を図る。

(2) 活動組織（2009 年度 4 月現在）

【研究 SG】研究 WG は、2009 年度 4 月現在、以下の 3 つの研究 SG を設置している。

- ①授業評価研究 SG（主査校：神戸大学）
- ②Web 公開授業研究 SG（主査校：京都大学）
- ③出欠確認研究 SG（主査校：大阪成蹊大学）

【研究 WG 責任校】研究 WG は、神戸大学を責任校（任期は 2008 年度より 4 年間）とし、龍谷大学、京都大学、大阪成蹊大学の 4 大学で構成されている。

【研究部】研究 WG を推進する役割として、幹事会に、「研究部」を置く。2009 年度の研究部は、幹事校である神戸大学・龍谷大学・京都大学で構成されている。

（注） ①WG は、大学単位の参加とし、原則各大学 1 名を研究 WG に登録する。

②研究 SG の企画・運営、調査・研究、発表等の分担など、主体的に研究 WG に参加する。

③研究 WG・研究 SG の会合などへの参加旅費等は各大学の自費とする。

④SG は、個人登録とし、原則各大学 1 名とする。登録の総数によっては、各大学 2 名以上登録するも可能な場合もあり得るので、2 名以上の参加希望がある場合には研究部に可否を問い合わせる。

II. 2008 年度の研究 WG の活動報告

(1) 研究 WG の活動

- 研究部において、8 月 22 日に関西 FD 会員校に対して、メーリングリストを通じて、研究 WG、研究 SG（当初は、授業評価研究 SG および Web 公開授業研究 SG）への参加希望のアンケートを発信し、参加を募った。
- 10 月初旬にアンケートを締め切り、授業評価研究 SG、Web 公開授業 SG の二つの SG を始動すると共に、アンケートにて要望のあった出欠確認研究 SG の参加を会員校に対して呼びかけた。
- 2008 年度は、上記、3 つの SG を設置することとし、SG のメーリングリストを開設すると共に、メンバーの連絡を取りつつ、以下のような各 SG の活動を推進した。

(2) 「授業評価研究サブグループ（SG）」の活動

- 授業評価研究 SG は、関西地区 FD 連絡協議会において、2008 年 1 月に実施した「授業評価ワークショップ」の実績（『関西地区 FD 連絡協議会設立に向けて』：

http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/publication/kansai_fd.html 参照のこと）をふまえて、各大学での授業評価の実践に関わる情報を交換し、授業評価の活用に関わる課題を浮き彫りにするとともに、それらに関わる研究成果と情報共有に努めることを通して、授業評価研究コミュニティの形成を目指すこととした。

- 2008 年度現在、神戸大学（代表：米谷淳教授）を主査校とし、大阪大学、大阪歯科大学、大阪樟蔭女子大学、大阪商業大学、大阪成蹊大学、大阪体育大学、大阪電気通信大学、追手門学院大学、京都大学（2 名）、京都文教大学、京都薬科大学、神戸大学（主査校）、四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部、相愛大学、同志社大学、同志社女子大学、兵庫大学（2 名）、立命館大学、龍谷大学・龍谷大学短期大学部、流通科学大学（2 名）、和歌山信愛女子短期大学（2 名）、大阪青山大学、大阪工業大学、大阪商業大学、大阪電気通信大学、関西大学、関西医療大学、京都産業大学、京都薬科大学、神戸常盤大学（2 名）、天理大学、阪南大学の 32 大学から成る。2008 年度は、SG 会合を 1 回、公開研究会 1 回を実施した。
- **第 1 回会合：**2008 年 10 月 27 日（月）16:00～18:00、京都大学吉田南 1 号館共 106 室において、21 大学が参加して、授業評価研究 SG の第 1 回会合が行われた。関西 FD ワークショップの概要説明、各大学の授業評価に関わる状況と課題の報告などが行われると共に、3 月に開催予定の公開研究会の概要について了承が得られた。各大学の授業評価関係の課題としては、①Web 上での授業評価実施と回収率の低さの問題、②形骸化やマンネリ化、コスト、教員の反発、フィードバック、③アンケート内容の改訂の試み（項目を少なくする、設問をわかりやすくする、アンケート実施回数を増やすなど）、④実施方法の課題（実施科目数（全科目で実施するか、履修人数等の基準で選択するか）、記名式か無記名式か、web か紙媒体・マークシートか）、⑤実施目的の周知（教育力を高めること、教育改善など）、⑥フィードバックの具体例（教員が改善点についてコメントを書く、ホームページ、ニューズレター、リフレクションペーパーの活用、自身の授業のうち良かった点と悪かった点の明確化など）、⑦活用が各教員任せであり、組織的改善につながらない点、⑧達成目標の明確化の課題、⑨教員評価との関連、⑩教員が独自に作成する設問の開示と活用、などが挙げられた。
- **授業評価研究 SG 主催公開研究会：**2009 年 3 月 19 日（木）14:00～17:30、京都大学百周年時計台記念館・百周年記念ホールにて、第 2 回関西地区 FD 連絡協議会主催イベントとして、研究 WG・授業評価研究 SG が主催して、公開研究会「授業評価から FD 評価へ」を開催した。参加者数は、会員校より 114 名、非会員校より 120 名、総計 234 名（開催スタッフを含む）であった。なお、当日の話題提供者等は、会員校より、米谷淳（神戸大学）「大学間連携による授業評価研究の意義」、安岡高志（立命館大学）「授業評価の性質と今後の活用」、大塚雄作（京都大学）「進行・論点整理」、田中毎実（京都大学）「総括」、また、会員校以外からの講師として、栗田佳代子（大学評価・学位授与機構）「自らの教育活動についての授業評価の価値」、羽田貴史（東北大学）「研究能力と教育能力の相互転移性」であった。

(3) 「Web 公開授業研究サブグループ (SG)」の活動

- Web 公開授業研究 SG は、京都大学が開発した Web 公開授業のシステムを利用して、会員校の参加者を中心に、オンラインを活用した公開授業・検討会を実施するとともに、Web 公開授業のあり方に関する共同研究を実施することを目的とする。

- 2008 年 10 月現在、京都大学（代表：酒井博之特定准教授）を主査校とし、12 大学より 13 名が参加している。2008 年度は、10 月 27 日（月）～11 月 10 日（月）、島根大学生物資源科学部橋本哲准教授の「森林水文学」について、Web 公開授業・検討会を行うと共に、Web 公開授業研究 SG の会合を 1 回開催した。
- **Web 公開授業研究 SG 会合**：2008 年 11 月 14 日（金）15:00～17:00、京都大学吉田南 1 号館共 201 室において、Web 公開授業研究 SG の第 1 回会合を開催した。主な議事は以下の通りである。
 - ①サブグループ・メンバーリストにそって名前・所属等の自己紹介
 - ②2008 年度第 1 回 Web 公開授業 [10 月 27 日（月）～11 月 10 日（月）「森林水文学」（島根大学生物資源科学部）] の概要と報告
 - ③実践の手順や方法について
 - ・参加者の人数や構成（学内／大学間、学問分野別／混在、若手／ベテラン、モデレータ）
 - ・検討会をオンライン（電子掲示板）で行うことの是非
 - ・教員の研究授業、新人教員研修、仮説実験検討授業、学生主導型授業の発展などとしての公開授業の実施
 - ・ターゲットの明確化（授業改善を志向する教員、アドバイスを必要とする教員など）
 - ・授業のタイプやテーマで類型化して、参加者を募る（例：ディスカッション、グループワーク、ロールプレイなど）
 - ・授業を蓄積し、データベース化する
 - ④システムの整備
 - ・セキュリティ（個人情報）、メーリングリストの整備
 - ⑤授業の撮影に関する肖像権の問題
 - ・学生への授業撮影の承諾手続き
 - ・未成年の学生に対しての手続き
 - ⑥Web 公開授業研究 SG の今後の方向性
 - ・ML での情報交換
 - ・対面での会合を持つ
 - ・成果をオンライン上で共有する
 - ⑦2008 年度第 2 回 Web 公開授業の実施
 - ・「資源論」（流通科学大学）
 - ・2009 年 1 月～2 月の実施予定

(4) 「出欠確認研究サブグループ (SG)」の活動

- 出欠確認研究 SG は、教育効果を高めるために、授業における効率的かつ正確な出欠確認方法を確立することを目指して、各大学の出欠確認に関わる情報交換、及び、確認方法のシステム化に関する研究などを共同して推進することを目的とする。具体的には、大人数クラスでも効率的に（短時間で）出欠確認を行う方法の確立、出欠確認による出席促進効果、遅刻防止効果の検証、出欠データ活用による多欠席者、早期退学予備軍の発見と支援に関する研究、簡易アンケート・小テストなどを組み合わせた効果的な出欠確認方法の確立、学部・学科全体で出欠確認に取り組むための方法の確立、教職員の協力関係構築に必要なプロジェクト組織作りに関する研究などを課題としていく予定である。

- 2008 年度現在、大阪成蹊大学（代表：福永栄一教授）、大阪工業大学、大阪商業大学、堺女子短期大学、龍谷大学の 4 大学が参加している。会合には、その他、京都大学、追手門大学などが、オブザーバー参加している。2008 年度は、2 回の研究 SG 会合と、大阪成蹊大学のケータイを利用した授業アンケートの実地見学会を 2 度実施した。
- **第 1 回会合：**2008 年 12 月 8 日（月）10:00～12:00、大阪成蹊大学第二会議室において、第 1 回の出欠確認研究 SG の会合を行い、本研究 SG の趣旨を共有し、本年度の具体的な活動計画、研究方法などについて確認し合った。各大学の出欠確認の実情と課題については、以下のような報告があった。
 - ①学生証の IC カードを読み取るシステム
 - ・費用、導入目的（学生の行動把握）、出席と遅刻の区別をする時間設定、データの扱い基準などシステムの概要。
 - ・出席簿の廃止、出席率向上と遅刻減少などの効果。
 - ・体育やゼミなど読取装置がない教室での出席が把握できないこと、アンケートや小テスト、コミュニケーションツールとして使えないことなどの課題。
 - ②出欠確認システム導入検討
 - ・IC カードのメリット、IC カードの貸し借りなどの実態、携帯電話での出欠確認の機能・効果などを今後検討したい。検討を通じて「出席とは何ぞや」を考えたい。
 - ③携帯電話での出欠確認システム
 - ・教員が独自で開発したシステムを使っている例が報告されたが、現段階ではのシステムを利用する教員はごく少数である。
 - ④携帯電話での出欠確認システムのテスト導入
 - ・後期から、12 名の教員 20 授業程度でテスト使用している例が報告された。11 月中旬から下旬にかけて、携帯電話での授業評価も 12 名の教員の授業でテスト実施し、特に問題がなかったため、1 月に学部全体の授業評価でテスト使用することになった。このシステムの機能は、携帯電話での履修、出席登録、授業評価、時間割確認、休講確認、掲示板、学生の出席状況把握、出席データの CSV 出力、小テスト結果等の記録・集計などがある。
- **授業アンケート見学会：**大阪成蹊大学では、携帯電話での授業アンケート（授業評価）を実施している。学生は、ほぼ 100%携帯電話を所有しており、その携帯電話でアンケートに回答させることで、僅かな時間で回答することができ、また、直ぐに集計することもできる。さらに、授業中に実施するので、回答率も確保することができるといったメリットをもっている。そこで、2009 年 1 月 21 日（水）10:40～12:10（参加者 9 校 10 名）、1 月 26 日（月）10:40～12:10（12 校 18 名）、携帯電話での授業アンケート（授業評価）、出欠確認の見学会を大阪成蹊大学現代経営情報学部において実施し、アンケートの結果、「参考になった」と好評を得た。
- **第 2 回会合：**2009 年 2 月 16 日（月）16:00～18:00、大阪成蹊大学第二会議室にて、出欠確認研究 SG の第 2 回会合を行った。大阪工業大学における出欠確認の現状について、大阪工業大学の石橋靖弘氏より報告があり、それに基づいて質疑応答があった。参加は、SG メンバー 5 大学 8 名、オブザーバー 2 大学 2 名、計 10 名であった。

①報告の概要

- ・授業開始時間から 10 分後までが出席でそれ以降が遅刻となるため、学生が授業に早く来るようになったことが最大の効果である。
- ・導入当初は教員からの反対も多かった。

- ・システムおよび活用状況について、現在全教員へアンケートを実施している。
- ・全教員の 50%以上が利用しており、80%以上が満足しているようだ。
- ・全教員の 30%が出欠確認としてこのシステムを利用している。
- ・カード忘れ等は出席カードなどで確認しておき、授業終了後手入力する。
- ・IC カードの読取は入室の 1 回で、退出では行わない。
- ・カードを読ませるだけで授業に出ない学生もいる。
- ・行動把握という観点では問題ないが、教員からは何とかして欲しいという要望が出ている。
- ・システムを運用するための準備が大変である。時間割は 3 万レコードありその準備作業に時間がかかる。

②質疑応答・自由討議

- ・学生の行動把握をどうやって出欠確認、成績評価に反映させるか。
- ・導入を反対する教員はいなかったか。いた場合どのように説得したか。
- ・出欠確認の方法を複数の大学で考え、共有化することはできないか。
- ・学生の行動把握は、今後、大学で取組まざるをえない課題となるであろう。
- ・各大学の事例発表を通じて、知識のみならずエネルギーも貰える。

Ⅲ. 研究 WG の 2009 年度の活動方針（案）

(1) 研究 WG の活動方針

- 各研究 SG ごとに、自主的に、共同研究活動を推進する。研究 WG は、その活動に必要な支援を行う。
- 各研究 SG の活動内容は、関西 FD のホームページに掲載すると共に、公開研究会や大学教育研究フォーラム（京都大学）の場などを利用して、共有を図る。
- 研究 SG を創設したいという要望が会員校から寄せられた際には、研究 WG で検討して、基本的には、新たに開設する方向で支援する。

(2) 「授業評価研究サブグループ (SG)」の計画案

- SG 会合を 2 回程度（5 月・10 月・他）開催し、3 月の大学教育研究フォーラムにおいて、ラウンドテーブル等を企画して、研究発表とその共有を図る。
- 昨年度実施した FD 実態調査において、授業評価アンケートの公開の許諾が得られた大学の調査票を、関西 FD のホームページ上に公開する。
- 会合開催費（資料代・お茶代）、および、講師謝金・旅費を必要とする。

(3) 「Web 公開授業研究サブグループ (SG)」の計画案

- Web 公開授業を 2 回程度開催する。次回は南木睦彦先生（流通科学大学）の公開授業を 5 月に予定。
- SG 会合を 2 回程度開催する。

(4) 「出欠確認研究サブグループ (SG)」の計画案

- SG 会合を隔月のペースで進めていく。

(5) 研究 WG の予算案

- 会合開催費（資料代・お茶代）、および、講師謝金・旅費を必要とする。会議・研究会等 10 回程度の会議費（50,000 円）、公開研究会等資料代（50,000 円）、外部講師招聘 5 名程度（50,000 円×5 名＝250,000 円）、計 350,000 円。

関西地区 FD 連絡協議会 共催／協賛の手続きについて

関西地区 FD 連絡協議会会員校における事業について、本協議会の共催／協賛の申請は以下の手順により行う。

【協賛手続き】

1. 開催する事業に関して、(a) ～ (e) の項目を記載の上、本協議会事務局宛にメールにて申込を行う。申請は事業開催日の 30 日前を締切とする。

- (a) 日時
- (b) 主催者
- (c) タイトル
- (d) 種類・テーマ

(d)については、以下の Web ページの「研修マトリックス」を参考の上、適当なものを選択してください。

* 種類については 1 つ、テーマについては 3 つまで選択可能。

<http://www.kansai-fd.org/council/matrix.html>

2. 申請内容について、幹事会にて審議を行う。

3. 異議がなければ、事業概要（チラシ PDF など）を本協議会 HP に掲載および会員校向けのメーリングリストに配信する。

4. 事業終了後、30 日以内に以下の方法で、イベント概要、成果などを記載した本協議会広報用の報告原稿を事務局宛に提出する（協賛の場合、提出は任意）。分量は A4 用紙で 0.5 ～1 頁程度。報告があった場合、協議会ホームページに掲載する。また、ニュースレターへ掲載することもある。

【共催手続き】

1. 担当 WG で共催事業を企画し、開催する事業に関して、(a) ～ (e) の項目を幹事会で提示する。

- (a) 日時
- (b) 主催者

(c) タイトル

(d) 種類・テーマ

(d)については、以下の Web ページの「研修マトリックス」を参考の上、適当なものを選択してください。

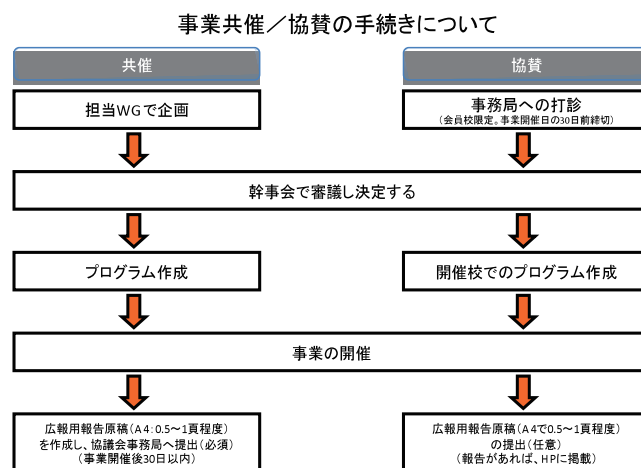
* 種類については1つ、テーマについては3つまで選択可能。

<http://www.kansai-fd.org/council/matrix.html>

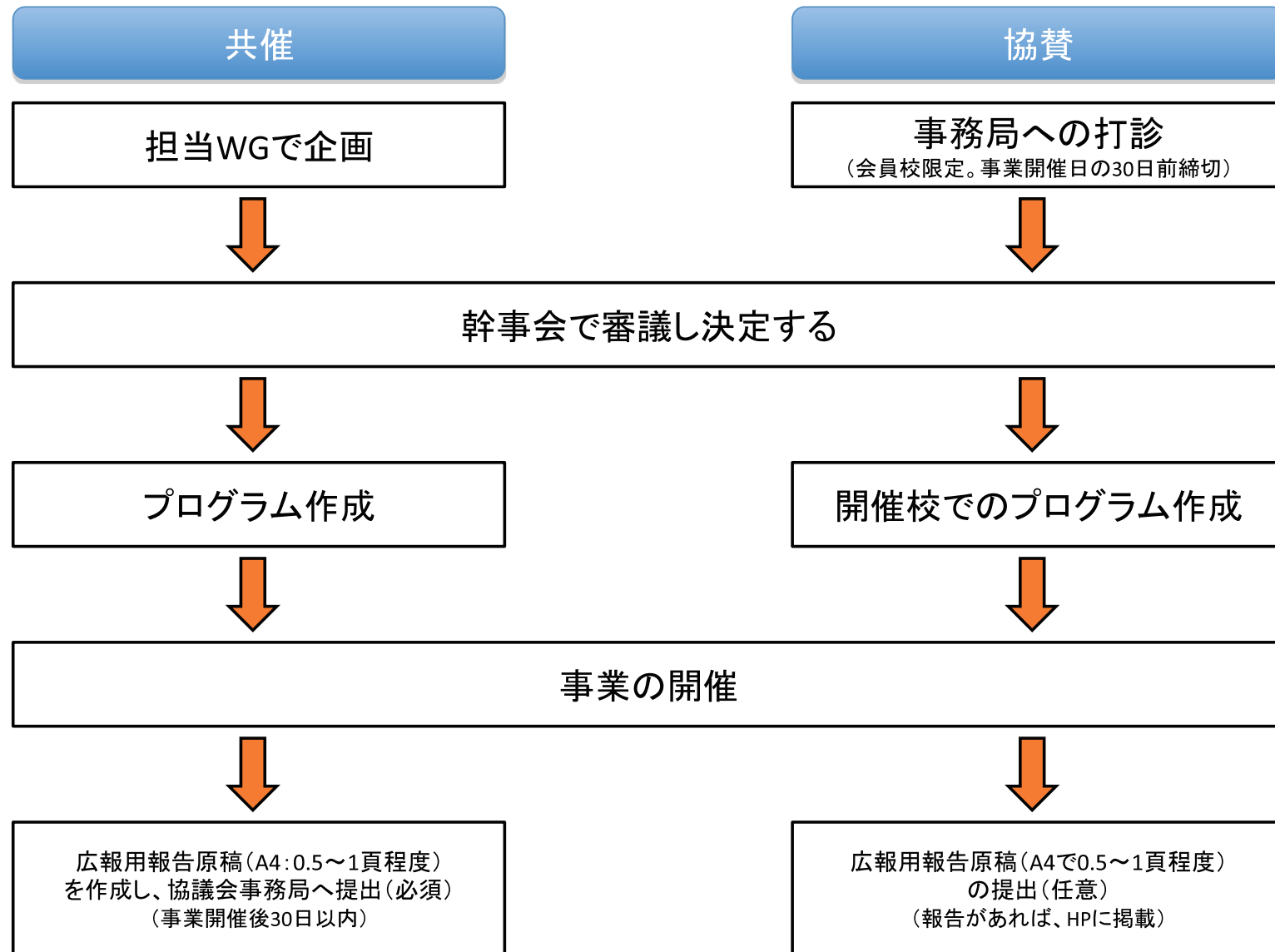
2. 幹事会にて審議を行う。

3. 異議がなければ、事業概要（チラシ PDF など）を本協議会 HP に掲載および会員校向けのメーリングリストに配信する。

4. 事業終了後、30 日以内に以下の方法で、イベント概要、成果などを記載した本協議会広報用の報告原稿を事務局宛に提出する（必須）。分量は A4 用紙で 0.5～1 頁程度。報告原稿は協議会ホームページに掲載するとともに、原則として協議会ニュースレターへ掲載する。事業主催者の HP 等に掲載記事を本協議会へ通達すれば、協議会 HP よりリンクを張ることも可能。



事業共催／協賛の手続きについて





→ ホーム → サイトマップ → プライバシーポリシー 文字サイズ変更 小 中 大

検索ワードを入力

検索

協議会概要

活動

ワーキング・グループ

事務局

刊行物

リンク

ホーム → 研修マトリックス/カレンダー

協議会について

■ 研修マトリックス

関西地区FD連絡協議会が主催・共催・協賛する研修事業は、事業の種類やテーマにあわせて、下のよう研修マトリックスによって分類されます。参加する研修事業の位置づけを確認するのに役立ててください。

なお、このマトリックスは暫定的なものですので、今後、必要に応じて適宜修正を行う可能性があります。あらかじめご了承ください。（画像をクリックすると拡大版が表示されます）

	【テーマ】						
【種類】	政策・制度 (Policy)	理念・歴史 (History)	組織 (Organization)	カリキュラム (Curriculum)	教授学習 (Teaching & Learning)	評価 (Evaluation)	その他
講演会							
シンポジウム							
ワークショップA (一般教職員向け)							
ワークショップB (初任者向け)							
その他							

協議会概要

- ▶ 研修マトリックス/カレンダー
- ▶ 協議会について
- ▶ 代表幹事校挨拶
- ▶ 組織
- ▶ WGの設置及び活動方針
- ▶ WGに関する申合せ
- ▶ 規約

—FD情報支援WG—
講演講師等
情報支援行っています。

第2回関西地区FD連絡協議会
公開研究会
「授業評価 から
FD評価へ」

*「ワークショップ」は、講演会・シンポジウムのようにフロアとして参加するだけでなく、グループディスカッションや発表等の作業を伴うもの。

■ 研修カレンダー

関西地区FD連絡協議会では、下のような研修事業を実施しています。

本協議会による「共催」「協賛」を希望される場合は、研修カレンダーの各項目を記入の上、以下のメールアドレスあて申請してください（なお、テーマについては上限3つまでとします）。幹事会の審議によって決定します。ただし、「共催」とする事業は、本協議会のワーキンググループのいずれかがプログラム構成の段階から関わったものであることを条件とします。

E-mail: office@kansai-fd.org

番号	日時	主催者	タイトル	種類 / テーマ	関西FD
--	08.8.22	京都大学 高等教育研究開発推進センター	大学教育改善のためのセンター組織 —教育ガバナンスの視点から—	シンポジウム	共催
--	08.9.17	大阪大学 大学教育実践センター	21世紀型『市民』の育成と学士力	シンポジウム	共催
08-1	08.10.25	関西学院大学 関西学院大学大学総合教育研究所	これからの学士課程教育 —大学に何が求められているのか—	シンポジウム (P、C)	共催
08-08.11.15		京都大学	学生の成長を促す	シンポジウム	協賛

Ⅲ-1. 資料 7

2	08.11.19	高等教育研究開発推進センター	日本版・単位制度の実質化	(P, C, TL)	協賛
08-3	08.11.29	関西地区FD連絡協議会	思考し表現する学生を育てる ～書くことをどう指導し、評価するか？～	シンポジウム (C, TL, E)	主催
08-4	08.12.13	龍谷大学 大学教育開発センター	学士課程の体系化に向けて	シンポジウム (P, C)	協賛
08-5	08.12.23	流通科学大学 大学教育高度化推進センター	公開授業の限界と課題	シンポジウム (TL)	協賛
08-6	09.3.7	京都光華女子大学 キャリア推進センター	社会人基礎力を考える ～学生個人を大切にしたキャリア教育の推進～	シンポジウム (P, TL)	協賛
08-7	09.3.19	関西地区FD連絡協議会	授業評価からFD評価へ	研究会 (E)	主催

■ 参加証明書について

関西地区FD連絡協議会が「主催」もしくは「共催」する事業については、参加者のうち希望者に対して、本協議会名の「参加証明書」を発行します（ただし、発行対象は、会員校に所属する教職員に限られます）。研修の履歴を残す上で役立ててください。発行を希望される方は各事業の申込みの際にお申し出ください。

[▲ ページの先頭へ](#)

関西地区FD連絡協議会

[→ ホーム](#) [→ サイトマップ](#) [→ プライバシーポリシー](#)

Copyright(C)2008 関西地区FD連絡協議会 All Rights Reserved.

Ⅲ－２．FD情報支援ワーキンググループ

１．概要

FD 情報支援ワーキンググループでは、下記の案内をもとに、関西地区 FD 連絡協議会の参加校に対する FD 情報支援をおこなった。

FD 情報支援 WG からのお知らせ

「講演講師、シンポジウム・ワークショップのプログラムに関する相談、情報提供」

担当：山田礼子（同志社大学）、高橋哲也（大阪府立大学）、溝上慎一（京都大学）

FD 情報支援 WG では、関西地区 FD 連絡協議会・加盟校の FD 活動促進を支援するべく、FD に関する相談、情報提供の窓口を設置しました。FD に関するテーマで講演会・シンポジウム・ワークショップを開催したいが、そのテーマに取り組んでいる講師を紹介してほしい、プログラムの相談に乗ってほしい、などの場合にご利用ください。

この活動の担当は溝上（京都大学）がおこないます。お問い合わせは下記の要領でお願いします。

- ・連絡先：溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

メールアドレス（smizok@hedu.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）、

研究室 TEL（075-753-3047）

＊まずはメールでお問い合わせの詳細をお知らせください。折り返し、メールでお返事、ご希望の場合は電話でお返事します。

- ・ご相談の内容によっては少しお時間を頂くこともあります。あらかじめご了承ください。

2. 本年度の活動実績

下記の通りで、計 15 件の支援業務をおこなった。

0501-2009	京都女子大学	FD 研修の仕方、情報支援提供のしくみについて
0501-2009	関西福祉科学大学・ 関西女子短期大学	「初年次教育(スタディスキル)」講師
0508-2009	大阪経済大学	GPA について
0528-2009	甲子園大学	兵庫県下で招かれている FD 講師
0611-2009	大阪国際大学	学士力に関すること
0715-2009	大阪商業大学	厳格な成績評価について
0717-2009	藍野大学	初年次学生に対する取り組み
0723-2009	近畿大学	FD とは何かーその意義と価値
0912-2009	京都教育大学	教員養成大学における FD 活動、学生を育てる視点
0923-2009	近畿大学	初年次教育
0925-2009	滋賀医科大学	授業評価に関する FD
1019-2009	京都大学	キャリア教育
1207-2009	兵庫大学	学士家庭教育の背景・目的
1224-2010	大阪歯科大学	教育学・教授法の基礎
1119-2010	奈良女子大学	大学教育における PDCA の実際

3. 抱える課題

活動を実施するなかで、教義の FD を越えてさまざまなテーマに関する講師情報が求められることがわかった。しかし、あるテーマでは〇〇先生が活躍されている、という情報を持っても、その先生を実際に知らなければなかなか推薦できないのも事実であった。その意味で、2009 年度は、自身の関心を越えて幅広くシンポジウムやイベント等に参加し、講師情報を集める必要があると感じられた。

(溝上 慎一)

Ⅲ－３．FD 共同実施ワーキンググループ

FD 共同実施ワーキンググループは、初任者研修共同実施の企画立案をはじめ、会員校が共同で実施する活動を行っている。ワーキンググループの構成は、以下の通りである。

大阪大学（常任幹事校）、関西学院大学（幹事校）、京都大学（代表幹事校）（以上 FD 共同実施部）、畿央大学、京都文教大学、滋賀県立大学、びわこ成蹊スポーツ大学、平安女学院大学、立命館大学、龍谷大学

1. 活動方針

<初任者研修共同実施の意義>

初任者研修の実施は、その必要性を感じている大学は多いものの、研修の内容、あるいは実施方法などについては多くの大学が課題を抱えている。特に、小規模校の場合はその必要性にも関わらず、研修の実施率が低いことが指摘されている（田口ほか,2006）。これは、小規模校の場合、少ない初任者を対象とした研修を行うコストの問題や、実施体制の充実の問題が背後にあると考えられる。従って、複数の大学が共同で初任者研修を実施することにはメリットがあるといえる。

<活動内容>

関西地区 FD 連絡協議会加盟校の全新任教員を対象とした「初任者研修」を関西地区 FD 連絡協議会の主催で実施する。

関西地区 FD 連絡協議会加盟校は、各大学において実施する初任者研修のプログラム作成を支援する（Junior Faculty が対象、個別大学の実情に併せたプログラム開発の支援）。

<活動指針>

単なる How to にとどまらないような、理論的な背景をふまえた初任者研修プログラムを作成する。ルーティン化していくことを目指すが、同時に、形骸化したプログラムにならないような体制作りを念頭においてすすめる。

2. 2009 年度の活動報告

<FD 共同実施ワーキンググループ研究会の実施>

共同実施ワーキンググループでは、2011 年春の関西地区 FD 連絡協議会会員校の初任者を対象とした初任者研修の共同実施にむけて、従来の初任者研修に関する様々な知見を学ぶことを目的として 3 回の研究会を実施した。参加大学は大阪大学、関西学院大学、畿央大学、京都大

学、京都文教大学、滋賀県立大学、びわこ成蹊スポーツ大学、平成女学院大学、立命館大学、龍谷大学(50音順：会員校のみ)となっている。

第1回研究会：2009年8月12日 京都大学

2009年8月12日に京都大学で開催された第1回目の研究会では、国立教育政策研究所統括研究官の川島啓二先生と新潟大学准教授の加藤かおり先生を講師として、新任教員研修プログラムの基準枠組みについて講演して頂いた。

大阪大学、関西学院大学、畿央大学、滋賀県立大学、平安女学院大学、立命館大学、京都大学から16名の参加があった。プログラムは以下の通りである。

14：00～ 参加者自己紹介・FD共同実施WG活動計画について

14：20～ 新任教員研修プログラムの基準枠組みについて

(講師)

国立教育政策研究所統括研究官 川島啓二先生

新潟大学准教授 加藤かおり先生

15：30～ 質疑応答

16：00～ 情報交換会

川島先生には「大学教育改革の文脈から見た『基準枠組み』」というタイトルで、現在の日本の大学教育改革の文脈やFDの展開について、また現状において求められる大学教員の専門性、大学教育やFDのあり方について情報提供を頂いた。また、加藤先生には「基準枠組みを用いた新任FDプログラム開発支援」というタイトルで、国立教育政策研究所研究プロジェクトの一環として行われている新任FDプログラム開発支援WGのこれまでの活動と、実際に作成された初任者研修プログラムの基準枠組みについて紹介して頂いた。

この講演を受けて、基準枠組みの理論的背景や具体的事例、枠組みを活用・運用することのできる人材とはどのような者であるのか、また、実際の初任者研修においてこの基準枠組みをどのように用いればよいのかといった点が議論された。このプロジェクトは、基準枠組みによる新任FDプログラムの開発支援やそれを通じた枠組みの精度の向上といった点が目指されており、現在も一定の成果をあげているものである。この点について学ぶことができたことは、本研究会にとって非常に有益であった。

第2回研究会：2009年10月12日 大阪大学

2009年10月12日に大阪大学で開催された第2回目の研究会では、山形大学高等教育研究企画センター教授の小田隆治先生を講師として、「山形大学の初任者研修－私的展望を含めて－」というテーマで講演して頂いた。

大阪大学、関西学院大学、畿央大学、京都文教大学、びわこ成蹊スポーツ大学、立命館大学、龍谷大学、京都大学から18名の参加があった。プログラムは以下の通りである。

13：00 ～ 会場校挨拶 大阪大学・大学教育実践センター長・工藤眞由美

WG代表挨拶 大阪大学・山成数明

参加者自己紹介

13 : 40～ FD 共同実施 WG 活動計画について

京都大学・田口真奈

13 : 45～ 山形大学の初任者研修について

(講 師)

山形大学 高等教育研究企画センター教授

小田隆治先生

14 : 45～ 大阪大学の初任者研修について

大阪大学・服部憲児

14 : 55～ 関西学院大学の初任者研修について

関西学院大学・矢倉達夫

15 : 05～ 両プログラムへの小田先生コメントならびに全体ディスカッション

16 : 00～ 次回 WG 研究会テーマについて

山形大学には初任者研修という形で独立したものはないとのことであったが、山形大学や山形大学が中心となった“樹氷”や“FD ネットワークつばさ”といったネットワークのFDの理念や実際の内容の紹介を通じて、効果的な初任者研修を行うための視点を提示して頂いた。

その後、大阪大学と関西学院大学で現在行われている初任者研修の紹介とそれに対する小田先生からのコメント、全体ディスカッションという流れのなかで、自校教育の重要性の再確認とそこから研修をどのように発展させればよいのかといった点が議論された。また、特に大規模ではない大学においては研修を行うことのできる人材が不足しているため、ネットワークの重要性がより大きなものになるといった点も重要であることが確認された。初任者研修の理念から実施まで幅広い議論が行われ、今後の初任者研修共同実施に向けた重要な視点を得ることができた研究会になったといえる。

第3回研究会：2009年12月1日 関西学院大学

2009年12月1日に関西学院大学で開催された第3回の研究会では、第1回、第2回の研究会での議論を受け、2010年3月17日に京都大学で実施される初任者研修担当者ワークショップの内容や、2010年度の活動予定、そして2011年春に実施される初任者研修の共同実施の内容について議論が行われた。

大阪大学、関西学院大学、京都文教大学、びわこ成蹊スポーツ大学、立命館大学、龍谷大学、京都大学から14名の参加があった。プログラムは以下の通りである。

13 : 00～ 参加者自己紹介

13 : 05～ FD 共同実施 WG 活動計画についての確認

京都大学・田口真奈

13 : 10～ これまでの研究会の振り返り

京都大学・半澤礼之

13 : 20～ 初任者研修共同プログラムの参考情報の共有

1) 基準枠組みについて

京都大学・半澤礼之

2) 海外の事例について

京都大学・田口真奈、びわこ成蹊スポーツ大学・吉田政幸

3) 関西学院大学の初任者研修について

関西学院大学・矢倉達夫

4) 立命館大学の取り組みについて

立命館大学・安岡高志・井上史子

14:20～ ディスカッション：共同実施すべき初任者研修プログラムとは

15:00～ 初任者研修担当者ワークショッププログラム案、事後アンケート案

京都大学・半澤礼之

15:10～ ディスカッション：初任者研修担当者ワークショップの進め方について

15:30～ ディスカッション：今後のWGの在り方について

ワークショップの内容については、共同実施ワーキンググループのメンバーが2009年度の活動報告をしっかりと行うこと、また、ワークショップのプログラムの中にグループ討論を導入して、初任者研修のプログラムを各大学に持ってきてもらい、それを土台にして議論してもらうことなどが確認された。

2010年度の活動予定については、大阪大学や関西学院大学といった幹事校の初任者研修を見学し、そこから2011年度の初任者研修共同実施に向けたコンテンツ作りをおこなっていくことが確認された。

最後に2011年度より実施される初任者研修の共同実施の内容について、具体的な内容は2010年度の活動の中で決定していくことが確認された。形式としては関西地区FD連絡協議会で大きな初任者研修を一度行うこと、また、それで十分ではない点については、幹事校を中心とした大規模校が自校の初任者研修の一部を開放し、他校の初任者を受け入れることも検討課題とされた。

3. 今後の活動にむけて

2009年度に実施した3回の研究会で得られた知見を用いて、2011年度に実施される初任者研修共同実施の具体的な内容、方法を確立していくことが2010年度の活動の中心となる。

引用文献

田口真奈,西森年寿,神藤貴昭,中村晃,中原淳(2006) 高等教育機関における初任者を対象としたFDの現状と課題,『日本教育工学会論文誌』,30(1),19-28

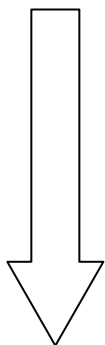
資料：初任者研修実施に向けてのフローチャート

第1フェーズ 情報収集

初任者研修の実施状況、担当者等の情報把握・分析（2008年6月実施）

第2フェーズ プログラム作成

2009年6月29日 2009年度第1回打ち合わせ、WG結成



FD共同実施WG研究会 2009

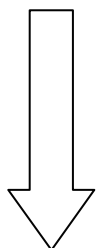
国内において、一般的に行われている初任者研修の概要の確認
（ガイダンスと研修の区別の必要性、ターゲットとされている
初任者の範囲の確認など）、特徴的な初任者研修を実施している
国内外の大学の取り組みの紹介と検討

2009年8月12日 第1回研究会 2009 於：京都大学

2009年10月13日 第2回研究会 2009 於：大阪大学

2009年12月1日 第3回研究会 2009 於：関西学院大学

2010年3月17日 初任者研修担当者ワークショップ開催

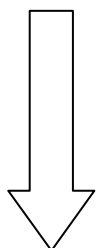


FD共同実施WG研究会 2010

先行事例の見学（特徴的な取り組みの大学の初任者研修の見学会）
初任者研修プレ実施（関学・阪大はプレ実施を兼ねて、評価を行う）
初任者研修のプログラム企画

第3フェーズ プログラム実施

2011年 関西地区FD連絡協議会主催 初任者研修の実施



FD共同実施WG研究会 2011

第1回初任者研修の評価

第2回初任者研修の企画

各大学独自の「初任者研修」実施のための支援、相互研修など

第4フェーズ サステナブルなプログラムへ

（田口 真奈、半澤 礼之）

Ⅲ－４．FD連携企画ワーキンググループ

FD 連携企画部と FD 連携企画ワーキンググループ（WG）は、2010 年 3 月現在、以下の大学で構成されている（敬称略）。

◇FD 連携企画部

- ・立命館大学（安岡高志）・・・責任校
- ・関西大学（池田勝彦）
- ・神戸常盤大学（江上芳子）
- ・京都大学（松下佳代、石川裕之、河崎美保）・・・事務局

◇FD 連携企画 WG

上記の FD 連携企画部、および以下の関西 FD パイロット校の計 6 校

- ・藍野大学医療保健学部理学療法学科（平山朋子）
- ・京都ノートルダム女子大学人間文化学部英語英文学科（須川いずみ）

1．活動内容

1－1．目的と特色

FD 連携企画 WG の目的は、関西地区 FD 連絡協議会の会員校のうち、共通のテーマ（問題別、アプローチ別、組織別、ディシプリン別など）を抱える大学がグループを作り、協働で問題への対処に取り組むことである。そのため、一回限りのイベントを実施するのではなく、継続的に情報交換しながら、実質的な教育改善・FD を進めるための緩やかなコミュニティを形成することをめざしている。

FD 連携企画 WG には、ニーズの高いテーマに関連して自校の FD に取り組む会員校を「関西 FD パイロット校」として支援するという特色がある。2010 年 3 月現在、神戸常盤大学、藍野大学、京都ノートルダム女子大学の 3 校が関西 FD パイロット校となっている。

1－2．活動計画

FD 連携企画 WG では、以下のようなプロセスで活動を展開していく予定である。

- ① 特定のテーマについてシンポジウムを開催する。
- ② シンポジウム参加校を中心にグループを形成する。
- ③ グループ内での先進校の取組事例の学習や自校での試行を WG が支援する。
- ④ グループは、関西 FD のホームページ・ニュースレターや大学教育研究フォーラム等で活動報告を行う。
- ⑤ 毎年、①～④を繰り返しながら、大学間連携を拡大・進化させる。

2. 2009年度の活動報告

FD 連携企画ワーキンググループでは、2009 年 12 月 12 日（土）に関西大学千里山キャンパスにおいて、第 3 回関西地区 FD 連絡協議会主催イベント「ワークショップ：思考し表現する学生を育てる―書くことをどう指導し、評価するか？Ⅱ―」を開催した（共催：関西大学教育開発支援センター）。本 WG では、昨年度同じテーマでシンポジウムを開いたが、本年度は、昨年度参加者の「もう少し議論を深めたい」「時間をもっとゆったりとってほしい」という要望に応えるためにワークショップをもつことにした。以下に、このワークショップのプログラム、当日の状況、アンケート結果を報告する。

◇プログラム

13:30～14:40

開会あいさつ

市原 靖久（関西大学 副学長）

田中 每実（関西地区 FD 連絡協議会 代表幹事校代表）

13:40～14:30

小講演「書くための問いを生み出すことを支援する」

鈴木 宏昭（青山学院大学教育人間科学部 教授）

14:30～15:00

事例紹介「添削から創作へ―関西大学全学共通科目「文章力をみがく」―」

三浦 真琴（関西大学教育推進部 教授）

15:15～16:45

グループワーク

16:45～17:30

全体討論

17:30～18:00

総括コメント

井下 千以子（桜美林大学心理・教育学系 教授）

◇当日の状況

参加者は会員校から 34 名、非会員校から 17 名の計 51 名であった。中には、東京や福岡など遠方からの参加者もあった。本テーマへの関心の深さがうかがわれる。

第Ⅰ部では、安岡高志氏（立命館大学、本 WG）による司会のもと、小講演と事例紹介がおこなわれた。青山学院大学の鈴木宏昭氏による小講演「書くための問いを生み出



すことを支援する」では、EMU（＊5つの感情タグ[へえ、そうそう、ムカッ、??、ここ大事]を用いて資料の気になる部分に下線を引きコメントを書き込んだり、グループメンバーとコメントを共有し、互いにコメントし合うことができるツール)によるマーキング(下線引き)とタグづけ(感情タグ)を活用した実践や Blog を利用

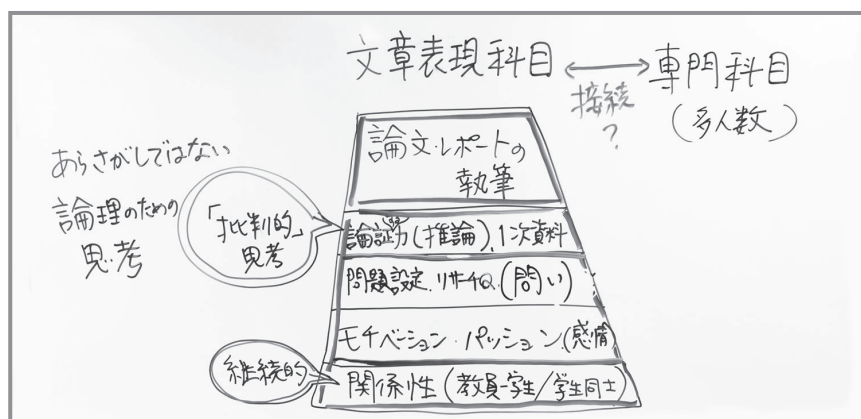


した協調学習の実践が報告され、問題設定およびそのプロセスを認知的・感情的に支援することの重要性と、協調学習がそれらを促進する可能性について示唆された。続いて、関西大学の三浦真琴氏による事例紹介「添削から創作へー関西大学全学共通科目『文章力をみがく』ー」では、自身の授業実践の報告を通じて、“What to write”、“For whom to write”、“Why to write”の重要性と、学生による「創作活動」を通じたライティング教育の可能性が提示された。

河崎、石川（京都大学、本 WG）によって昨年度のシンポジウムのまとめとグループワークの進め方についての説明がなされた後、第Ⅱ部に入った。第Ⅱ部では、参加者が3つの教室、あわせて9つのグループに分かれてグループワークがおこなわれた。グループワークは、持参した資料にもとづいて各自が自身の実践を紹介し、それをグループで共有し議論した後、さらに3つの各グループから、書くことの指導と評価についての論点を報告し議論するという形で展開した。



第Ⅲ部では、松下（京都大学、本 WG）による司会のもと、グループワークで出た論点等について各教室代表が発表し、それをふまえて参加者全員による全体討論がおこなわれた（下図は、教室3の発表で使われた図）。



全体討論では特に、「what（何を書くか；内容）と how（どう書くか；形式）の関係」、「書くことと考えること、読むこととの関係」についての議論が白熱した。「what と how の関係」に関しては、「両者は単純に二分できるものではなく、車の車輪のように共に必要である」（鈴木宏昭氏）との認識を踏まえつつ、「指導にあたってはどちらに重きをおくかという選択にせ



まられる」、「学生のタイプによって、how を教わることで what の深まりへとつながる場合もあればそうでない場合もあるのではないか」、「求められる what は大学によって異なってくるのではないか」といった意見が交わされた。さらに、どういった what や how が望ましいかを判断するには、「誰に対して書くのか」（一般的な他者か学問の蓄積としての他者か等）もまた問う必要があるとの認識が得られた。また「書くことと考えること、読むこととの関係」については、鈴木氏の小講演にあったように、「書くこと」の前に感情を喚起するようなものを「読む」ことが「考えるに値する問題を発見すること」、「書くこと」へとつながっていくなど、一般的にいう「考える」行為と「書くために考える」、「書きながら考える」といった行為とを分けてとらえることで、「思考・表現」指導のあり方についての議論をよりクリアに展開できるのではないかと展望が得られた。

その後、本ワークショップの締めくくりとして、桜美林大学の井下千以子氏より、「ライティング教育と Curriculum Development—学びの先を見通す力—」と題して今回のワークショップに対する総括コメントがおこなわれた。今回のワークショップでは、ライティング教育において、①いま、どんなことが問題となっているのか、②どんな授業が展開されているのか、③学生の反応、各大学の現状、といった点が明らかになっ



たが、それと同時に、カリキュラム全体にわたって、初年次あるいは学習技術だけでなく、専門教育につなげ自己の発達も視野に入れた総合的な学士課程カリキュラムとしてライティング教育を考えていくことの必要性、すなわち「学びの先を見通す力」をいかに涵養していくかという課題が提起された。

◇アンケート結果

「ワークショップへの参加満足度」、「プログラムの前半（小講演・事例紹介）の有意義度」、「プログラムの後半（グループワーク・全体討論・総括コメント）の有意義度」を5件法（1：まったく満足していない/有意義ではなかった～5：非常に満足している/有意義だった）によりたずねたところ、それぞれの評定平均は4.3、4.4、4.2であった（回答者39名）。全体的に参加者の満足度は高く、各プログラムの内容も有意義であったとの評価が得られた。

ワークショップに満足した理由をたずねたところ、主に「具体的な事例に基づく各大学の実践状況を知るとともに、理論的な枠組みを知ることができた」ことが挙げられた。また、プロ

グラムについて有意義であると感じた理由としては、「小講演と事例紹介で紹介されているアプローチが対照的でバランスが取れていた」、「グループワークではライティングに関する多様な意見を知ることができた」といった回答が得られた。さらに、ワークショップ参加による最大の収穫についてもたずねたところ、「『大講演』形式でないFDの理想的な雰囲気になれることができたこと」、「グループワークで各自の資料を持参することで、より具体的な話をすることができたこと」、「自分自身の思考のクセ—当たり前だと思っていたことが実はそうではない—という気づきを得たこと」など、本ワーキンググループの活動趣旨に適った評価が得られた。

最後に、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点」をたずねたところ、グループワークに関する意見が多く寄せられた。特に、グループ討論の時間が短かったことや、大学間の格差があり、「思考し表現する」のうち「思考」にまで議論が発展しない場面があったことなどから、「時間をより長くとり、主題・問題点を限定する」といった提案が出された。

来年度も同じテーマでワークショップを継続するかどうかについては、以上のアンケート結果をふまえて、WG内で検討していきたいと考えている。

本WGメンバーには、全体会での司会、グループワークのオーガナイザーやファシリテータとして活動していただいた。とりわけ、会場を提供しこのワークショップの運営にあたってくださった関西大学教育開発支援センターのみなさま、なかでも実務を担当してくださった杉本仁嗣氏に感謝の言葉を申し上げたい。

(松下 佳代、石川 裕之、河崎 美保)

Ⅲ－５．広報ワーキンググループ

広報ワーキンググループ（WG）は、協議会に関する広報業務を担当している。具体的な活動として、ニュースレターの発行（年２回）、ホームページおよびメーリングリストの維持・管理を行っている。

広報部は、大阪市立大学（矢野裕俊：責任校）、和歌山大学（菊川恵三）、京都大学（酒井博之、藤本夕衣、笹尾真剛：連絡担当）で構成されており、2010年３月現在、広報部と広報WGのメンバーは一致している（敬称略）。

2009年度の広報WGにおける活動報告を以下におこなう。

１．ニュースレターの発行

本年度のニュースレターは、第２号（７月、編集責任者：矢野裕俊）と第３号（12月、編集責任者：菊川恵三）の２号を発行した（図１）。印刷部数は800部で、全会員校宛に送付した。非会員校についても入会を促すため各号１部を送付した。ニュースレターのPDF版は本協議会ウェブサイトへ掲載し、一般公開している。



(a) 第２号

(b) 第３号

図１．関西地区FD連絡協議会ニュースレター

本年度は、協議会が実施するイベント等の活動報告のほか、会員校間の情報共有を促進させるため、会員校におけるFDの取り組み紹介を充実させてきた。第2号では第2回総会の報告に加え、大阪私立大学、関西大学、京都精華大学、関西学院大学、流通科学大学より、第3号では京都産業大学、滋賀大学に活動報告記事の作成を依頼した。また、第3号では研究WGの活動に焦点を当て、主に研究サブグループの活動紹介をおこなった。

2. ウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理

関西地区FD連絡協議会のウェブサイト（<http://www.kansai-fd.org>）の維持・管理を随時おこなっている。本年度は、研修マトリックスおよび研修カレンダーの設置、国内のFDネットワーク組織のリンク集の作成などをおこなった。現在、月に平均2,300件（ユニークユーザー数では345件／月）のアクセスがある。

また、幹事校や各ワーキンググループおよび研究サブグループにおける連絡用、全会員校向けの案内用のメーリングリストを適宜作成、更新し、管理している。



図2. 関西地区FD連絡協議会 ウェブサイト

3. MOST 講習会の共催について

2010 年度総会にて計画されている「FD 活動の報告会」におけるポスター発表およびパネルディスカッションの発表原稿の作成と会員校間での蓄積、共有を、京都大学で構築した大学教員のための教育研修システム「MOST」(<https://online-tl.org>)を活用しておこなうことが提案されており、システム利用のための講習会を 3 月 17 日に共催としておこなった。なお、「FD 活動の報告会」は、会員校相互の組織的 FD 活動の情報交換を目的として、FD 情報支援 WG と広報 WG が合同で行うことが予定されている。本稿作成時点で MOST 講習会は未実施であるが、プログラムを資料として転載しておく。

最後に、今年度の課題を踏まえた広報 WG 次年度の活動計画について述べる。

まず、本協議会のウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理、ニュースレターの発行を引き続きおこなう。ウェブサイトについては、本協議会設立から 2 年が経過し、サイト内のコンテンツが充実してきた一方、授業評価アンケート事例集など、会員校が適宜参照可能にしておくべき資料へのアクセス方法が分かりにくいといった声も聞かれた。また、全会員校宛のメーリングリストは、現在主に事務局より協議会に関連する情報を配信しているが、会員校内の FD イベント告知、教職員公募情報、その他会員校で共有すべき情報について、会員校側から自由に情報発信が可能なチャンネルを持たない。以上を踏まえ、ウェブサイトのコンテンツの整備と、会員校に所属する教職員が自由に情報発信可能なメーリングリストまたはそれに類する機能を追加する。ニュースレターについては、本年度に引き続き、関西 FD における取り組み報告のほか、会員校で実施されている FD の取り組み紹介の充実を図る。

さらに、上記の MOST 講習会で触れた「FD 活動の報告会」を次年度総会において FD 情報支援 WG と共同で実施する。広報 WG は主にポスター発表と、発表原稿およびこれに関連する会員校間の相互評価をオンラインで蓄積・共有するための支援をおこなう。後者を実現するため、MOST 内に会員校の教職員がアクセス可能なオンラインコミュニティを立ち上げ、協議会ウェブサイトとの連携を図る。会員校間の相互評価については、冊子を作成し、会員校に配布する予定である。

(酒井 博之)

MOST 講習会

日 時：2010 年 3 月 17 日（水）14:30～17:00（終了後、情報交換会）

場 所：京都大学吉田南総合館 北棟 共北 24CALL 教室

主 催：京都大学高等教育研究開発推進センター

共 催：関西地区 FD 連絡協議会 広報 WG

概 要

来る 4 月 24 日開催の関西地区 FD 連絡協議会第 3 回総会では、会員校の FD 活動に関わる報告を、ポスター発表、パネルディスカッションの形式で試行的に実施することが計画されています。会員校の FD 活動をオンライン上で共有・蓄積するために、ポスター発表の原稿は“MOST”と呼ばれるオンライン・システム (<https://online-tl.org/>参照) で作成するとたいへん便利です。本講習会は、関西 FD 会員校の教職員を対象に、総会での発表原稿を実際に MOST を利用して作成するものです。本協議会会員校に所属する教職員の方はどなたでも参加できます（ただし 1 法人につき 2 名まで）。ふるってご参加下さいますようお願いします。

参加条件：関西地区 FD 連絡協議会会員校に所属する教職員。4 月 24 日開催の本協議会総会において、ポスター発表を希望する会員校を優先します。定員は 30 名。

プログラム

14:00 受付開始

14:30 趣旨説明、MOST・KEEP Toolkit の概要説明

14:50 スナップショットの作成事例紹介（藍野大学平山朋子先生）

15:05 操作説明

15:30 参加者によるスナップショット作成

17:00 終了

17:30 情報交換会

Ⅲ－６．研究ワーキンググループ

研究ワーキンググループ（WG）は、共同して研究すべき課題に関して、研究サブグループ（SG）などを設置し、共同研究を企画・推進する。研究SGは、全加盟大学からの要望に基づき設置・構成され、各研究SGの参加者の中から主査を指名し、活動が円滑に進むようにサポートする。共同研究の成果は、関西FDのワークショップや各種フォーラム、ホームページ（HP）などで広く共有を図る。現在、研究WGは、責任校を神戸大学とし、WGの運営を管理・支援する「研究部」を構成する神戸大学、龍谷大学・龍谷大学短期大学部、京都大学、及び「研究SG主査校」の大阪成蹊大学から構成されている。

本年度は、昨年度に続き、「授業評価研究 SG」（主査校：神戸大学）、「出欠確認研究 SG」（主査校：大阪成蹊大学）、「Web 公開授業研究 SG」（主査校：京都大学）において活動を行った。WG 及び各 SG の目的や活動内容については、関西地区 FD 連絡協議会の WG に関するホームページ（<http://www.kansai-fd.org/wg/>）からアクセスできるようになっている。

以下、各 SG の本年度の活動内容の概要を報告する。

１．授業評価研究 SG の活動

授業評価研究 SG では、2009 年 6 月に第 1 回会合が開催された。会合には SG に所属する 19 大学 22 名の参加があり、授業評価研究の現状と今後の課題について活発な議論が交わされた。

また、昨年度、関西地区 FD 連絡協議会で実施した FD 活動に関する調査結果を基に、各大学における授業評価アンケートの活用状況に関する結果をまとめ、その概要とアンケート事例集を公表した。

１－１．会合議事

日時: 2009 年 6 月 16 日（火）16:00～18:00

場所: 京都大学 吉田南 1 号館 共 106 室

1. 挨拶

- ・ 授業評価研究 SG 主査である米谷淳教授（神戸大学）より、挨拶が行われた。
- ・ 大塚雄作教授（京都大学）より、関西 FD 各 WG の紹介と、研究 WG の SG について説明があった。
- ・ 各出席者から自己紹介が行われた。

2. 昨年度の活動報告

- ・ 公開研究会「授業評価から FD 評価へ」（2009 年 3 月 19 日）の報告
 - 大塚教授より、2009 年 3 月 19 日に行われた公開研究会の様子、各話題提供の内容に

ついて資料にそって報告があった。

- フロアから活発な意見が出た（既に授業評価をやっているところとこれから取り組むところという二極化、何のために授業評価をするのか、FD をどうとらえるか、ティーチング・ポートフォリオをどう積み重ねていくか、など）
- ・ 授業評価アンケート事例集の公開と関西地区における授業アンケートの活用状況
 - 昨年実施した調査において、回収できた授業評価アンケート 106 部を HP にアップした。
 - 「関西地区における授業アンケートの活用状況」について説明があった。各大学の授業アンケートに関する、1.大学独自の特徴、2.授業改善のための組織的活用、3.授業改善以外の組織的活用について、いくつかの分類基準を取り上げ、概要について説明があった。
 - 調査内容について、以下のような質問、コメントが挙げられた（成績との対応、結果の公表の範囲や方法、実施目的と活用方法の一貫性など）。
 - 今後の研究課題として、教員評価との関係は、あらためて調査する必要があるのではないか。

3. 本年度の活動計画

- ・ 福永栄一准教授（大阪成蹊大学）より、本年度の活動計画「学生の携帯電話から回答入力させる授業評価アンケートの共同運用」について提案があった。
- ・ 携帯を利用すれば、コスト削減、情報の共有が容易になるなどの利点があり、FD 推進にもつながる。大学間で共同運用できれば、ノウハウ共有・蓄積にも役立つ。
- ・ 戦略 GP に申請中。しかし、2、3 校であれば、大阪成蹊大学のシステムで十分対応可能なので、今年秋の大学の共同研究補助金（7 月申請）の利用も検討中。
- ・ アンケート項目は紙で配り、入力は携帯でおこなうので、項目は大学の独自性を反映できる。自由記述入力も可能。
- ・ ユーザー単位の利用や、ミニッツペーパーなど毎回の授業の理解度確認も視野に入れている。
- ・ 履修している学生しか回答することはできない。その場にはいない学生や遅刻者も特定できる。
- ・ その他、以下のような質問、コメントが挙げられた（項目や分析方法を統一した場合の活用法、大学として共同運用する場合のキャンパスマナー（教室では携帯電源切る）との兼ね合い）。

4. その他（自由討論）

- ・ 少人数クラス(大学院を含む)における授業アンケートの実施と、公表の仕方についての課題。
- ・ コアカリキュラムに関する授業アンケートの困難点。
- ・ アンケートの数字がよければいいとは思わない。そこから何を読み取るかが重要。



1-2. 授業評価アンケートに関する調査結果の公開

2008年度に関西地区FD連絡協議会・会員校ならびに関西地区の大学・短期大学を対象として、FD活動に関する調査を実施し、合計126校からの回答を得た。

調査の結果、多くの大学から実際に使用している授業評価アンケートの公開の許可を得ることができた。調査結果のまとめとして、以下の2つを公開している。

- ・ 「授業評価アンケート事例集」
 - (http://www.kansai-fd.org/activities/reports/jhsg_es.html)
- ・ 「関西地区における授業アンケートの活用状況」
 - (http://www.kansai-fd.org/activities/reports/sg_20090622.html)

2. 出欠確認研究SGの活動

出欠確認研究SGでは、本年度は4回の会合と2回の授業アンケートの実施見学会を行った。以下、各会合の概要と見学会の参加者についてまとめた。

なお、本年度第5回目となる会合は2010年2月19日(金)、午後4時30分から午後6時まで、大阪大学中之島センターキャンパスイノベーションセンター内、大阪商業大学サテライト・キャンパス405号室にて、「関西医療大学における出欠管理と授業評価アンケートについて」をテーマとして開催予定である。

2-1. 会合の議事

(a) 第1回会合議事

日時: 2009年4月24日(金) 16:00~18:00

場所: 大阪商業大学 本館3階 会議室Ⅲ

参加: 大阪商業大学、大阪工業大学、大阪成蹊大学

1. 大阪商業大学における出欠確認の現状発表

資料に基づき、大阪商業大学における出欠確認の現状の説明があった。

2. 大阪成蹊大学より今年度の活動案が提示され、了承された

活動案概略

- ・ 会合を2ヶ月に1回のペースで開催する。
 - ・ 大阪成蹊大学で、携帯電話での出欠確認、授業評価の見学会を実施する。
 - ・ S Gおよび協議会参加校を対象として、携帯電話での出欠確認、授業評価のテスト使用を呼びかけ、希望があれば使用し、その効果などを確認する。
3. 大阪成蹊大学より協議会総会での発表内容の報告があった
 4. 大阪成蹊大学より本年度の共同研究に関する提案があり、検討することになった
 5. 自由討論

大阪商業大学および大阪成蹊大学の報告等についての質疑応答が行われた。

6. 次回研究会開催日程等の確認

日程: 6月26日(金) 午後 16:30～18:00

場所: 大阪成蹊大学

発表: 大阪成蹊大学

(b) 第2回会合議事

日時: 2009年6月26日(金) 16:30～18:00

場所: 大阪成蹊大学 第二会議室

1. 幹事校挨拶

大阪成蹊大学宗像学長より挨拶があった。

2. 新規会員紹介

京都文教大学と摂南大学が新規に会員となった。

3. 大阪成蹊大学の報告

～大阪成蹊大学現代経営情報学部での携帯電話での出欠確認、授業評価アンケートの導入・運用経緯～

携帯電話での出欠確認、授業評価アンケートの特徴、他システムとの比較、2005年に前任校に導入した際のプロジェクトチーム構成、導入手順、システム導入での課題などが報告された。

4. 自由討議

携帯電話での出欠確認、授業評価アンケートをテスト使用するために開発業者に協力を依頼すること、テスト使用を普及させるための仕組み作り、予算獲得などについて意見交換された。

5. 次回研究会開催日程の確認

京都文教大学の携帯電話での授業評価アンケートの実施結果報告と決まった。10月に京都文教大学で開催するが、日程は8月以降に決定する。開催時間は16時で調整する。

(c) 第3回会合議事

日時: 2009年10月23日(金) 16:30～18:20

場所: 京都文教大学 常照館第一会議室

1. 会場校挨拶

京都文教大学人間学部 学部長の野口雅昭氏より挨拶があった。

2. 参加校・参加者紹介

7 大学 1 機関 13 名が順に自己紹介を行った。

3. 京都文教大学の報告

※携帯電話を使つての授業評価アンケートについて(資料あり)

パワーポイント資料に基づいて説明があった。

4. 携帯電話での出欠確認システム「i-MAS」のテスト使用状況の報告

(1) 京都文教大学

3 名 (FD 委員) の教員が各自 1 授業テストしている。各授業規模は 250 人、80 人、60 人。これまで 3 回出欠確認を行った。1 回目は教員・学生ともに慣れていなかったもので、出欠確認に 10 分を要したが、2 回目以降は使い方を学生同士で教えあうなど、トラブル無くスムーズに出欠確認ができています。

(2) びわこ成蹊スポーツ大学

個々の学生の全授業に関する出席状況が把握できるなど、テスト当初から非常に有効なシステムとして取組んだ。9 月末に 10 名程度の教員で始めたが、1 ヶ月たった今では、19 名 (専任教員 44 名から出欠が取り難い実技系の教員を除くと過半数を超えている) でテストしている。

「このシステムを使ってやるぞ!」という雰囲気ができており、携帯が苦手な先生は若い先生がサポートしている。

200 人授業であれば 10 人程度、40 人授業であれば 2 人ぐらいが携帯を使えない学生がいる。しかし、学生の乗りもよく「今日は 2 番かな? 5 番かな」などと楽しみながら実施している。

(3) 大阪商業大学

11 月 2 日より 10 名の教員でテスト使用を行う予定である。クラス規模は 250 名から 50 名まで。12 月第 2 週目には携帯電話でアンケートを行う予定である。

5. 自由討議

京都文教大学の報告に関しての質疑応答が行われた。

6. 次回研究会開催日程の確認

日時: 12 月後半 16:00 頃? ~

場所: 追手門学院大学

※詳細は、追手門学院大学・中井隆氏より後日案内予定。

(d) 第 4 回会合議事

日時: 2009 年 12 月 18 日 (金) 16:30~18:30

場所: 追手門学院 大阪城スクエア 中会議室

1. 参加校・企業

6 大学 2 企業 12 名

2. 追手門学院大学の報告

追手門学院大学における出欠確認の現状について、以下の報告があった。

- ・ 出席確認システム導入の契機
- ・ 出欠確認の現状

- ・ 出席確認システム導入の背景
- ・ 出欠確認システム導入の趣旨
- ・ 期待される効果
- ・ 現在提案中の運用方法
- ・ これからの導入スケジュール
- ・ システム概要（IC カードシステムを利用したシステム）など

3. 青森共同計算センターの報告

i-MAS 試行稼働サーバ障害に関する以下の報告があった。

- ・ 障害発生から復旧までの経緯
- ・ 障害原因とその影響
- ・ 障害に関する考察（ふりかえり）
- ・ SLA に関する考察（SaaS 版 i-MAS 提供における課題）など

4. 自由討議

2つの報告に関しての質疑応答が行われた。

5. 新規参加校紹介

新規メンバーとなった関西医療大学の紹介と挨拶があった。

6. 次回研究会開催日程、発表校の確認

日時: 2010 年 2 月 19 日(金) 16:30～18:00

場所: 大阪商業大学 サテライトキャンパス

発表: 関西医療大学

※会合終了後、5 校・2 企業 10 名で懇親会を実施した。

2-2. 学生の携帯電話から回答入力する授業評価アンケート、出欠確認の見学会

(a) 見学会 1

日時: 6 月 15 日 (月) 15:30～17:30、17 日 (水) 14:30～16:00

15 日は 5 校 1 企業 7 名、17 日は 3 校 5 名、計 8 校 1 企業、12 名が参加。

(b) 見学会 2

日時: 12 月 4 日 (金) 14:40～17:00、8 日 14:30～16:30

4 日は 4 大学 6 名の参加、8 日は 4 大学 1 企業 8 名、計 8 大学 1 企業 14 名が参加。

3. Web 公開授業研究 S G の活動

Web公開授業研究SGでは、本年度1回（9月）の会合と2回のweb公開授業（6月、12月）を実施している。なお、第2回会合は、2010年3月2日実施予定（於：京都大学）である。

3-1. 会合議事

(a) 第1回会合議事

日時: 2009 年 9 月 4 日 (金) 15:00～17:00

場所: 京都大学 吉田南 1 号館 1 共 23 教室

参加者: 横見宗樹 (大阪商業大学)、渡辺幸重 (畿央大学)、倉茂好匡 (滋賀県立大学)、
南木睦彦 (流通科学大学)、田口真奈、酒井博之、笹尾真剛 (以上、京都大学) (敬称略)

1. 参加者自己紹介

2. Web 公開授業の振り返り (2009 年 6 月実施分)

2.1 6月22日～7月6日「資源論」南木睦彦先生 (流通科学大学)

2.1.1 授業者の感想

- ・ 授業改善に有用な情報を得ることはできた
- ・ 書き込みの確認と回答が大変であった
- ・ 公開期間終了後にまとめとして授業者がコメントをできるような機会があればよかった。

2.2.2 全体討論

- ・ Web 公開授業の活用方法: コミュニティをベースとした公開授業システムとしての位置づけ
- ・ 授業ベースで議論をするか、コミュニティベースで授業の議論をするか。
- ・ システム面での不具合とアクセス、投稿への影響 (映像視聴、文字化けなど)
- ・ 授業の内容に関する議論・投稿の是非
 - 専門性の違いとそこでの授業の共有について
 - 授業内容と手法の関係性について
- ・ 教員・学習者の学習環境の改善について
- ・ 特定コミュニティを対象とした Web 公開授業の導入の可能性
 - e.g.: 工学部・商学部などの科目、大講義での授業、初年次教育、板書の書き方など
 - どのような授業を公開授業とするか
 - Web では議論が促される授業がある方がいい
 - 成員間で課題が共有されていることが重要

3. 2009 年度活動スケジュール

3.1 2009 年度第 2 回 Web 公開授業の実施 (12 月予定)

- ・ 倉茂好匡先生 (滋賀県立大学) (11/4 講義分)
- ・ 授業名「物理学 I」 (1 年生対象)
- ・ 公開授業テーマ「基礎物理の授業の中の演示実験—演示実験 (デモンストレーション) を用いていかに学生の興味を引きつけられるか—」

3.2 2009 年度第 2 回 SG 会合の開催 (2010 年 2～3 月実施予定)

3－2．Web公開授業

(a) 「資源論」南木睦彦先生（流通科学大学）

テーマ：大衆化した文系私学の大規模授業「資源論」

公開時期：2009 年 6 月 22 日（月）～ 7 月 6 日（月）

なお、本公開授業の概要は、関西地区 FD 連絡協議会ニュースレター第 3 号にも掲載されている（http://www.kansai-fd.org/publications/pdf/news_letter_3.pdf）。

(b) 「物理学Ⅰ」倉茂好匡先生（滋賀県立大学）

テーマ：演示実験を用いた大講義でいかに学生を惹きつけているか

公開時期：2009 年 12 月 14 日（月）～28 日（月）

本取り組みに関するスナップショットが MOST（Mutual One System for Teaching & Learning: モスト）上で作成され、公開予定である（資料参照）。

（及川 恵、大塚 雄作）

初年次の基礎物理における演示実験の導入

倉茂 好匡（滋賀県立大学 環境科学部）

滋賀県立大学HP

はじめに～演示実験導入の背景

基礎物理、特に力学を学習する場合、その学習内容を通して物理現象を理解できるようになる必要がある。ところが、高等学校で物理を履修した学生であっても、「練習問題を解くことはできるが、それを現象と結びつけて考えることは不得意である」あるいは「教科書やドリルで扱った現象であっても、それを実際に観察したことがない」ということが多い。また、大学に入学して初めて物理（力学）を学ぶ学生にとっても、現象を理解せずに物理の法則を学んでも、その知識がなかなか定着しない。

一方、この講義は履修者が例年100名ないし130名程度であるため、個々の学生あるいは学生のグループに実験させている余裕はない。また、2年前期で「物理学実験」を開講しているため、本当に実験を行ってみたいと意図する学生に対して「物理学実験」を受講するよう誘導したいとの希望もある。そのため、学生の興味を引くような演示実験を講義中に行うようにしている。15回の授業のうち、11回の授業でなんらかの演示実験を行っている。

履修学生のほとんどは環境科学部の1年生である。このうち、20%程度の学生は高等学校で「物理学I・II」を履修しているが、残りの学生は高等学校で物理をほとんど学習していない。

授業の概要

基礎物理、特に力学について学ぶ。環境科学部の場合、2年次以降では流体を取り扱うことになるので、流体力学を履修するのに必要な力学を学ばせることが目的である。また、大きさのある物体の回転に関する問題にも対処できるよう、最後の4回は「剛体の力学」を学ぶようにしている。

実施時期は1年後期で、環境科学部の環境生態学科、環境政策・計画学科、生物資源管理学科の選択科目である。ただし、環境科学部の他学科学部生および他学部の学生が受講することも認められている。今年度は、工学部機械システム工学科の3年生2名も履修している。TAの配置は認められていない。

なお、学習内容の定着を図るため、毎回宿題を課することを原則としている。回収した宿題には必ず赤ペン添削を実施し、翌週の授業冒頭で返却することになっている。返却時には必ず学生の名前を呼び、一人一人に手渡すように配慮している。「手渡し返却の時間がもったいない」との指摘が学生からなされる場合もあるが、この「手渡し返却」により、私自身は学生の名前と顔を一致させるよう努力している。

シラバス (PDF)



授業の構成～演示実験の位置づけ

「物理学I」の授業で行っている演示実験には、「授業で扱った現象そのものを見せるためのもの」と「一見して不思議と思う現象を示し、それを物理的にのっとって解釈させるもの」の2種類がある。今回WEB公開するものは、「力学台車にブロックを乗せてゴムで引っ張る」演示実験は前者のもの、また「ガラスの上に裸で寝る実験」は後者のものである。

「一見して不思議と思う現象を示す」演示実験を行うことは、力学の授業運営上きわめて有効である。学生個々に「いったいなぜなのか」と考える気持ちを持たせることが容易になるうえ、学生の集中度も上昇する。

インパクトの強い演示実験を行ったときは、その理解の程度を量るための宿題を課すようにしている。本時の場合は「ガラスの上に裸で寝る実験」がなぜ安全なのかを、物理則を用いて論述させる問題を宿題の中に入れてある。物理則に乗っ取った論述になっていることを、今回の宿題の評価では重視している。

宿題 (PDF)

添削例

模範解答1

模範解答2

演示実験導入による学生の学習へのインパクト

授業者として、「学生の集中度が上がる」「学生がモチベーションをもって授業に臨んでいる」ことを授業中に実感している。



「学生による授業アンケート」結果（2008年度）では、「授業内容への興味」が平均4.0ポイント（全学平均3.6ポイント）、「教員の教え方の適切さ」が4.5ポイント（全学3.5ポイント）、「授業の満足度」が4.2ポイント（全学3.6ポイント）である。

個別意見を見ると、上記のような高評価の理由として「演示実験」および「宿題への丁寧な添削指導」が多くあげられている。

Web公開授業実践について

本授業は、Web公開授業で2週間公開され（2009.12.14～28）、オンライン掲示板上で検討会が行われた。本実践は、関西地区FD連絡協議会におけるWeb公開授業研究SGの取り組みである。

リフレクション

私の授業を多くの方にご覧いただけたこと、本当にうれしく思います。私としては、この授業は「特別に準備した授業」ではありません。いつもこのような調子で授業をしております。ただ、その中では演示実験が「少々大掛かり」なものであっただけです。

自分の授業をVTRで見てみて、学生のほとんどが授業に集中してくれている様子を確認でき、うれしく思っています。もっとも、やはり大人数授業の弊害もあり、「個々の学生に目が行き届いていない」現実も改めて突きつけられた感もあります。

でも、私の中等教育教員経験からいっても、「個々に目配り」できる人数規模は最大でも50名ですし、それも30名を超えるあたりから「質がさがる」ものです。したがって、大学での大人数授業では、授業を展開する上で「個々への目配り」に頼ることができません。それだけ、授業の内容や展開方法そのもので、「学生をひきつける」ことが重要になるのだと思います。

そんなとき、演示実験が理系授業でどれだけの効果があるのか、さらには宿題に対する赤ペン添削がどれだけ効果的なのか、視聴してくださった方々にお感じいただけたのなら、授業者として幸甚であります。

教員の皆さんへのメッセージ

私は、もともと中学・高等学校の理科教員である。東京の私立の中学高等学校にかつて勤務しており、地学と物理を担当していた。そのとき、先輩教員から「理科の授業では、本物に触れさせろ」「現象に触れさせろ」「実験を重視せよ」ということを繰り返し指導された。その学校の理科教育では、この点がきわめて重要視されていたのである。そして、このことの重要性は、実際に生徒が成長した過程を見て、私自身も痛感している。



したがって、大学の物理系の授業でも、可能な限り演示実験を取り上げたいと考えている。もちろん、マスプロ化した授業では、それこそ「舞台を利用した、大じかけの演示実験」にしなくてはならないことも容易に予想される。でも、工夫次第では、普通の授業で利用している教室でも実施可能だと思う。

ただし、このような活動を本当に効果的に行うのなら、講義科目にもTAの配置をしてほしい。私の大学では、講義科目へのTA配置は認められていないので、現状では「教員個人で行える範囲」での実施にとどまっている

私が行っている演示実験には「ネタ本」がある。このような実験に熱心な高等学校の物理の先生方が作成したテキストで、非常に面白い。大学の授業でも導入可能なものがたくさん入っている。力学のみならず、電磁気・波動・熱力学などのネタも多く示されている。物理系で演示実験を取り入れてみたい方には、ぜひ参考にさせていただきたい。

参考文献

- ・愛知・岐阜物理サークル編著「いきいき物理わくわく実験」新生出版
- ・愛知・岐阜・三重物理サークル編著「いきいき物理わくわく実験2」新生出版

Ⅲ－７．主催・共催・協賛イベント一覧

年月日	イベント概要
2009.5.30 【協賛 09-1】	<p>教育開発支援センター設立記念フォーラム「“Faculty づくり”からはじめるFD」</p> <p>主催：関西大学教育開発支援開発支援センター</p> <p>協賛：関西地区FD連絡協議会</p> <p>場所：関西大学千里山キャンパス第1学舎1号館千里ホール</p> <p>基調講演：寺崎昌男（立教学院）</p> <p>パネルディスカッション：“Faculty づくり”の取り組み</p> <p>報告：松下佳代（京都大学）</p> <p>飯吉弘子（大阪市立大学）</p> <p>寺崎昌男（立教学院）</p> <p>沖 裕貴（立命館大学）</p> <p>池田勝彦（関西大学）</p> <p>コーディネータ：三浦真琴（関西大学）</p>
7.25, 26 【協賛 09-2】	<p>大学生研究フォーラム 2009</p> <p>主催：京都大学高等教育研究開発推進センター／財団法人電通育英会</p> <p>協賛：関西地区FD連絡協議会</p> <p>場所：京都大学百周年時計台記念館 1階・大ホール、2階・国際交流ホール</p> <p>パネルディスカッション第1部</p> <p>テーマ「学生の何が育っていて、何が育っていないのか？ーボランティア・インターンシップ・大学教育改善ー」</p> <p>司会：溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）</p> <p>パネリスト：加藤敏明（立命館大学共通教育推進機構キャリア教育センター教授／センター長）</p> <p>岩井雪乃（平山郁夫記念ボランティアセンター助教）</p> <p>土持ゲーリー法一（弘前大学 21世紀教育センター教授／副センター長）</p> <p>講演1</p> <p>「プロフェッショナル志向を認め始めた日本企業の雇用システムー大学はこれにどう関わるかー」</p> <p>谷内篤博（文京学院大学人間学部教授）</p>

	<p>『学びの身体性』に学ぶ ―『江戸』の視点による現代教育の相対化― 辻本雅史（京都大学大学院教育学研究科教授）</p> <p>講演2 「キャリア教育と言わない大学生のキャリア教育 ―正規教育とキャリア教育の架橋―」 浦坂純子（同志社大学社会学部准教授） 「大学生に本当に必要なキャリア教育とは何か ―2007～2008年縦断調査にみる現代大学生の就職活動―」 下村英雄（独立行政法人労働政策研究・研修機構）</p> <p>基調講演： 「学部学生の間にキャリアについて内省、展望すべきこと ―自分の中に問うべきことと、広い世界に問うべきこと―」 金井壽宏（神戸大学大学院経営学研究科教授）</p> <p>パネルディスカッション第2部 テーマ「学生の『学ぶ』を育む ―経験知と専門知との往復による融合―」 司会：加藤敏明（立命館大学共通教育推進機構キャリア教育センター教授／センター長） パネリスト：中村陽一（立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科教授） 川上正浩（大阪樟蔭女子大学心理学部准教授） 高橋 進（長野大学企業情報学部教授／学部長）</p>
8.22, 23 【協賛 09-3】	<p>日本教育情報学会第 25 回年次大会 主催：日本教育情報学会 協賛：関西地区 FD 連絡協議会協賛 場所：立命館大学朱雀キャンパス</p> <p>基調講演：「21 世紀の教育改革の行方を探る」 結城章夫（山形大学学長） その他、シンポジウム、課題研究、一般研究</p>
11.10 【協賛 09-4】	<p>第 5 回全学 FD セミナー 主催：大阪大学教育情報室・大学教育実践センター 協賛：関西地区 FD 連絡協議会 場所：大阪大学ステューデント・コモンズ 2 階・セミナー室</p> <p>第一部：基調講演 「学生発案授業と主体的学び―学生参画型 FD で何ができるか―」 橋本 勝（岡山大学教授）</p>

	<p>第2部：大阪大学におけるFD活動について</p> <p>「授業アンケートとFD」</p> <p>佐藤宏介（大阪大学基礎工学研究科教授）</p> <p>「言語文化研究科におけるFD活動」</p> <p>日野信行（大阪大学言語文化研究科教授）</p> <p>我田広之（大阪大学言語文化研究科教授）</p> <p>「歯学研究科のFD活動」</p> <p>竹重文雄（大阪大学歯学研究科教授）</p> <p>「大学教育実践センターにおける新しいFD活動の取組について」</p> <p>服部憲児（大阪大学大学教育実践センター准教授）</p>
<p>11.14</p> <p>【共催 09-5】</p>	<p>第 80 回公開研究会「学生の声から探る教育改善の課題—京都大学工学部の授業アンケート・学生調査を通して—」</p> <p>主催：京都大学高等教育研究開発推進センター</p> <p>共催：関西地区FD 連絡協議会</p> <p>場所：京都大学 吉田キャンパス 吉田南構内 吉田南1号館共31（311室）</p> <p>進行：大塚雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター 教授）</p> <p>開会の辞：米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構教授／関西地区FD連絡協議会研究WG主査）</p> <p>趣旨説明：大塚雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）</p> <p>話題提供Ⅰ：「工学部プロジェクトの展開と授業アンケート結果の概要」</p> <p>大塚雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）</p> <p>話題提供Ⅱ：「卒業時学生調査の結果—心理的適応に焦点を当てた検討」</p> <p>及川 恵（京都大学高等教育研究開発推進センター特定准教授）</p> <p>指定討論</p> <p>指定討論者：田中利幸（京都大学大学院情報学研究科教授／京都大学工学部新工学教育プログラム実施専門委員会委員長）</p> <p>松本和一郎（龍谷大学理工学部教授／関西地区FD連絡協議会研究WG 委員）</p> <p>高野 明（東京大学学生相談ネットワーク本部学生相談所講師）</p> <p>山田礼子（同志社大学教育開発センター所長）</p> <p>ディスカッション</p> <p>進行：大塚雄作</p> <p>討論</p> <p>閉会の辞</p> <p>田中每実（京都大学高等教育研究開発推進センター センター長・教授／</p>

	関西地区FD連絡協議会代表幹事校代表)
12.12 【主催 09-6】	<p>ワークショップ「思考し表現する学生を育てる―書くことをどう指導し、評価するか？ II―」</p> <p>主催：関西地区 FD 連絡協議会</p> <p>場所：関西大学千里山キャンパス 第2 学舎 C507 教室</p> <p>開会あいさつ</p> <p>市原靖久（関西大学副学長）</p> <p>田中每実（関西地区 FD 連絡協議会代表幹事行代表）</p> <p>小講演「書くための問いを生み出すことを支援する」</p> <p>鈴木宏昭（青山学院大学教育人間科学部教授）</p> <p>事例紹介「添削から創作へ―関西大学全学共通科目「文章力をみがく」―」</p> <p>三浦真琴（関西大学教育推進部教授）</p> <p>グループワーク</p> <p>全体討論</p> <p>総括コメント</p> <p>井下千以子（桜美林大学心理・教育学系教授）</p>
12.12 【協賛 09-7】	<p>第5回龍谷大学FD フォーラム「学士課程の体系化と教育の質保証」</p> <p>主催：龍谷大学大学教育開発センター</p> <p>協賛：関西地区 FD 連絡協議会</p> <p>場所：龍谷大学深草学舎 3 号館 101 教室</p> <p>基調講演「学士課程教育の質保証」</p> <p>講師：絹川正吉（国際基督教大学名誉教授・元学長、新潟大学理事）</p> <p>問題提起「教育の質保証に向けた教育プログラム評価」</p> <p>講師：生和英敏（（財）大学基準協会特任研究員、広島大学名誉教授）</p> <p>シンポジウム</p> <p>シンポジスト：</p> <p>絹川正吉（国際基督教大学名誉教授・元学長、新潟大学理事）</p> <p>生和英敏（（財）大学基準協会特任研究員、広島大学名誉教授）</p> <p>長田雅子（株式会社進研アド Between編集長）</p> <p>西垣泰幸（龍谷大学副学長・教学担当理事）</p> <p>コーディネータ：松本和一郎（龍谷大学大学教育開発センター長）</p>
2010.3.6	『学生個人を大切にしたキャリア教育の推進』最終成果報告会

<p>【協賛 09-8】</p>	<p>主催：京都光華女子大学キャリア教育推進センター 協賛：関西地区 FD 連絡協議会 場所：京都センチュリーホテル</p> <p>開会挨拶 一郷正道（京都光華女子大学学長） 基本報告「本学におけるキャリア教育」 山本嘉一郎（京都光華女子大学キャリア教育推進センター長、人間科学部教授） 外部評価報告 榎村久子（京都女子大学現代社会学部教授） 取組報告「各学科・関連部署からの報告」 各学科・関連部署代表 質疑応答・閉会挨拶</p>
<p>3.17 【主催 09-9】</p>	<p>初任者研修担当者ワークショップ</p> <p>主催：関西地区 FD 連絡協議会 共催：京都大学高等教育研究開発推進センター 場所：京都大学百周年時計台記念館</p> <p>共同実施部 WG の活動紹介 事例報告 グループワーク 全体討論 総括</p>
<p>3.17 【共催 09-10】</p>	<p>「MOST 講習会」</p> <p>主催：京都大学高等教育研究開発推進センター 共催：関西地区 FD 連絡協議会広報 WG 場所：京都大学吉田南総合館北棟共 24LL</p> <p>趣旨説明、MOST・KEEP Toolkit の概要説明 酒井博之（京都大学高等教育研究開発推進センター特定准教授） スナップショットの作成事例紹介 平山朋子（藍野大学医療保健学部理学療法学科准教授） 操作説明 参加者によるスナップショット作成</p>

<p>3.18, 19 【協賛 09-11】</p>	<p>第 16 回大学教育研究フォーラム</p> <p>主催：京都大学高等教育研究開発推進センター</p> <p>協賛：関西地区 FD 連絡協議会</p> <p>場所：京都大学 百周年時計台記念館・吉田南 1 号館・吉田南総合館</p> <p>開会の挨拶：松本 紘（京都大学総長）</p> <p>特別講演「大学教育の実践知を共有するーコミュニティ・ネットワーク・コモンズ」</p> <p>松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）</p> <p>シンポジウム「教える集団をどう組織するか」</p> <p>報告者：柳澤康信（愛媛大学学長）</p> <p>南木 睦彦（流通科学大学商学部教授・教育高度化推進センター長）</p> <p>根津知佳子（三重大学教育学部教授）</p> <p>義本博司（文部科学省高等教育局高等教育企画課長）</p> <p>司 会：田中每実（京都大学高等教育研究開発推進センター長／教授）</p> <p>溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）</p> <p>その他、個人研究発表、小講演、ラウンドテーブル企画</p>
--------------------------------	---

(笹尾 真剛)